第二章　葵の上の物語　六条御息所がもののけとなってとり憑く物語

［第一段　車争い後の六条御息所］

御息所は(御息所は車争いの後)、ものを思し乱るること(源氏の疎遠な態度に思い悩む事が)、年ごろよりも(この数年来よりも)多く添ひにけり(多くなってしまいました)。つらき方に思ひ果てたまへど(源氏が自分を妻に迎える気が無い薄情者だとは諦めて御出でだったが)、今はとてふり離れ(今を限りと振り切って)下りたまひなむは(伊勢に下りなさるのは)、「いと心細かりぬべく(女が廃るようで本当に寂しく)、世の人聞きも人笑へにならむこと(正妻に負けた日陰者と世間の物笑いになってしまう)」と思す(と御思いでした)。

さりとて(かと言って)立ち止まるべく(京に留まろうと)思しなるには(御思いに為れるかと言えば)、「かくこよなきさまに(あのように無礼極まりなく)皆思ひくたすべかめるも(左大臣家の従者に至る皆の者に蔑まされてしまった事は)、やすからず(決して許す事が出来ず)、*釣する海人の浮けなれや(一時も心穏やかでは居られない)」と、起き臥し思しわづらふけにや(寝ても覚めても頭を離れず)、御心地も浮きたるやうに思されて(沸々と怒りが収まらず)、悩ましうしたまふ(苦しんで居らした)。　*注釈に≪『源氏釈』は「伊勢の海に釣する海人の浮けなれや心一つを定めかねつる」（古今集、恋一、五〇九、読人しらず）を指摘。≫とある。獲物の引きを知らせる目印が波間に漂うという機知に富んだ仕掛けは、それ自体が今日でも有用な観察対象である面白さ以外でも諸々と意味が深いので、普遍的に多くの例えに用いられてきている。逆に言えば、この歌の面白さは「伊勢の海」または「伊勢の海人(あま)」と言った時に、当時の人が何を感じたのかに在る筈だが、それは不明。恐らく渡来の最新学識ないし技術を持つ管理階層でワケアリの有能集団だったのだろう。そうでなければ詰まらない。

大将殿には(源氏は)、下りたまはむことを(六条が伊勢に下りなさる事を)、*もて離れて(正妻の出産に気を取られて、あまり親身になれず)、「あるまじきこと(前例の無い、良く無い事)」なども(などとも)、妨げきこえたまはず(御引き止め為さらず)、　*此処の文意について、注は≪『集成』は「全くとんでもないことだ」の意に解し、『完訳』は「もてはなれて」の下に読点を打ち、「あまりかかわりを持とうともなさらず、もってのほかのこと」の意に解す。≫とある。『完訳』に従う。

「数ならぬ身を(物の数でもない私如き者を)、見ま憂く思し(愛想尽かされて)捨てむもことわりなれど(離れて行かれるのも御尤もですが)、今はなほ(今となっては)、いふかひなきにても(情けない男だとしても)、御覧じ果てむや(最後まで御付き合い下されるのが)、浅からぬにはあらむ(浅からぬ御縁なのでは無いでしょうか)」

と、聞こえかかづらひたまへば(受身の体で言い掛かり為さるので)、定めかねたまへる(御息所は決めかねていた)御心もや慰むと(悩みを紛らそうと)、立ち出でたまへりし(出掛けてみた御禊見物の際の)*御禊河の荒かりし瀬に(みそぎがはのあらかりしせに、御手洗川沿いでの場所取り争いを)、いとど(心底)、よろづいと憂く思し入れたり(万事が至極残念な事だったと思い込み為されて居ました)。　*「御禊河」は御手洗川だが、現在の葵祭りで行なわれる御禊の真似事は下鴨神社境内の

恐らくは少なからず人工的な御手洗川での小さな見世物のようだが、当時は実体として御所があり、御禊は朝廷の祭事として執行された大きな公式行事だったのだろう。

大殿には(左大臣家の正妻は)、御もののけめきて(邪気に取り付かれた容態で)、いたうわづらひたまへば(ひどく御加減が悪かったので)、誰も誰も思し嘆くに(家中が塞ぎ込んでいて)、御歩きなど便なきころなれば(夜遊びなど憚られた時なので)、二条院にも時々ぞ渡りたまふ(源氏は二条院にもほんの時々帰るほどでした)。

さはいへど(何と言っても)、やむごとなき方は(地位の高さにおいては)、ことに思ひきこえたまへる人の(別格の正妻としてお立て申し上げる夫人が)、めづらしきことさへ添ひたまへる(御出産を控えての)御悩みなれば(体調不良でしたので)、心苦しう思し嘆きて(源氏にとっても一大事の悩み事となって)、御修法(みしゅほふ、加持祈祷)や何やなど(や読経などを)、*わが御方にて(自分の部屋に寺僧を招いて)、多く行はせたまふ(何度も行わせ為さいました)。　*「わがおんかた」は注に≪左大臣邸の源氏の部屋をさす。≫とある。夫人自身は身重なので親元、特に母親の近くにでも居たのだろうか。何となく何かが分かり難い此処の文の書き方だ。

もののけ、生すだま(いきすだま、生霊)などいふもの多く出で来て(などが祈祷によって沢山あぶり出されて)、さまざまの名のりするなかに(其々の名前が人型の祈り紙に封じ込まれていく中に)、人にさらに移らず(どうしても人型に移らせる事が出来ず)、ただみづからの御身に(じっと夫人の体に)つと添ひたるさまにて(ひた付いたままで)、

ことに*おどろおどろしう(特に髪振り乱した恐ろしい形相で)わづらはしきこゆることもなけれど(取り憑いている様子でもないものの)、また、片時(決して片時たりとも)離るる折もなきもの一つあり(離れる隙を見せないものが一つ在りました)。いみじき(鍛錬を重ねた)験者(げんじゃ、修行僧)どもにも従はず、執念き気色(しふねきけしき、執念深さが)、おぼろけのものにあらずと見えたり(生半可なものでは無いと思われました)。　*「おどろ」は＜草木の乱れ茂っていること、やぶ＞と古語辞典にあり、髪の乱れた様、でもあるらしい。

大将の君の御通ひ所(生霊の仕業だとしたなら源氏の女たちの恨みでも買ったかと、左大臣家の御両親は源氏の通い先を)、ここかしこと思し当つるに、「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべてのさまには(ありきたりの浮気相手とは)思したらざめれば(源氏が思って居なさらない様なので)、怨みの心も深からめ(娘への恨みも深いかもしれない)」とささめきて(と内々に推察されて)、ものなど問はせたまへど(占い師に調べさせても)、さして聞こえ当つることもなし(何の卦も出ませんでした)。

もののけとても(かといって物の怪の仕業だとしても)、わざと深き御かたきと(特に恨みを買う因縁に)聞こゆるもなし(思い当たるものも在りませんでした)。

過ぎにける御乳母だつ人(亡くなった乳母のように娘に心残りが在った人や)、もしは親の御方につけつつ(もしくは親代々に取り憑いて)伝はりたるものの(祟り続けてきたものが)、弱目に出で来たるなど(弱みに付け込んで災いを起こそうと出て来たりで)、むねむねしからずぞ(病苦を災いしている親玉らしいものではなく)乱れ現はるる(小物が取り止めも無く出て来ました)。

ただつくづくと(夫人はただただ)、音をのみ泣きたまひて(声を上げてお泣きになって)、折々は胸をせき上げつつ、いみじう堪へがたげに(とても辛そうに)惑ふわざをしたまへば(体をよじり為さるので)、いかにおはすべきにかと(御両親は遣る瀬無く)、ゆゆしう悲しく(このまま死んでしまいはせぬかと悲しみ)思しあわてたり(途方に暮れて居らした)。

院よりも、御とぶらひ隙なく(お見舞いが頻りで)、御祈りのことまで(祈祷まで)思し寄らせたまふさまのかたじけなきにつけても(御手配下さる有難さを考えても)、いとど惜しげなる(ますます回復が待たれる)人の御身なり(夫人の御体調でした)。

世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも(世の中挙げて夫人の回復を願っていると御聞きに為って)、御息所はただならず思さる(六条は心穏やかでは在りませんでした)。

年ごろは(以前は)いとかくしもあらざりし(これほど激しくなかった)御いどみ心を(競い合いを)、はかなかりし所の車争ひに(つまらない見物事の場所取り争いで)、人の御心の動きにけるを(御息所が深く恨んでいた事を)、*かの殿には(夫人には)、さまでも思し寄らざりけり(そこまで気が付いて御出ででは無かったのです)。　*「かのとの」は分かり難い。「わが御方」に対する夫人や左大臣夫妻の部屋を指すのだろうか。何か大事な事が分かり難く感じる。

[第二段　源氏、御息所を旅所に見舞う]

かかる御もの思ひの乱れに(御息所はこうした車争いに拘る塞ぎ込みが過ぎて)、御心地(気分が)、なほ例ならずのみ(いつもより悪く病に罹ったに違いないと)思さるれば(お感じになって)、*ほかに渡りたまひて(療養所に出向かれて)、御修法などせさせたまふ(御祈祷をお受けに為りました)。　*「ほかに」は注に≪本邸には斎宮がいて、仏事は忌まれるので、他の場所に移ってさせる。≫とある。

大将殿聞きたまひて、いかなる御心地にかと、いとほしう(御心配なされ)、思し起して渡りたまへり(思い立って出向き為りました)。

例ならぬ(勝手の違う)旅所(たびどころ、仮宿)なれば(なので)、いたう忍びたまふ(特に内密に御出掛けなさいます)。心よりほかなる(大将殿は心ならずも)おこたりなど(通いそびれてしまった事などを)、罪ゆるされぬべく(分かって欲しいと)聞こえつづけたまひて(御息所に侘び続けなさって)、悩みたまふ人の御ありさまも(夫人の病みがちな様子も)、憂へきこえたまふ(心配だと御話しなさいます)。

「みづからはさしも(私自身はそれ程には)思ひ入れはべらねど(拘っても居ませんが)、親たちのいとことことしう(親たちが其れは殊更に)思ひまどはるるが心苦しさに(付き切りで看病なさるのに遠慮して)、かかるほどを見過ぐさむとてなむ(身重の妻が、少し回復してからと思って御無沙汰しております)。よろづを思し(事情を汲んで)のどめたる御心ならば(納得して頂ければ)、いとうれしうなむ(有難いのですが)」など、語らひきこえたまふ(言い訳なさいます)。

常よりも(何時に無く)心苦しげなる御けしきを(痛々しい御息所の御様子には)、ことわりに(源氏は心から)、あはれに見たてまつりたまふ(お見舞い申し上げなさいます)。

うちとけぬ朝ぼらけに(打ち解けぬまま迎えた早朝に)、出でたまふ御さまのをかしきにも(お帰りになる源氏の姿の美しさに)、なほふり離れなむことは(やはり振り切って伊勢へ下向するのは)思し返さる(御息所は御思い直しなさいます)。

「やむごとなき方に(元々の正妻に)、いとど心ざし添ひたまふべき(更に気持ちを傾注させる)ことも出で来にたれば(お目出度が有れば)、一つ方に思ししづまりたまひなむを(源氏も腰を落ち着け為さる筈だから)、かやうに待ちきこえつつあらむも(こうしてお待ち申し上げ続けるのも)、心のみ尽きぬべきこと(実らない思いだろうか)」

なかなか(そんな風に御息所が改めて)もの思ひの(憂いを)おどろかさるる心地したまふに(呼び起こされた気分で居た所に)、御文ばかりぞ(後朝の手紙だけが)、暮れつ方ある(この日の源氏の訪れが無い事を知らせる夕方に届きました)。

「日ごろ(数日来)、すこしおこたるさまなりつる心地の(小康状態だった妻の容態が)、にはかにいといたう苦しげにはべるを(急にひどく苦しみ出したので)、え引きよかでなむ(とても放っては出歩けません)」とあるを、「例のことつけ(いつもの言い訳)」と、見たまふものから(御息所は御覧になって)、

「袖濡るる恋路とかつは知りながら、おりたつ田子のみづからぞ憂き　(和歌 9-7)

「思ったよりも辛かった、泥に塗れて拾う恋　(意訳 9-7)

*此処で「田子(たご、農夫)」ないし「担桶(たご、天秤桶)」を持ち出す背景は特に無さそうで、技巧上で登場させたらしい。旅所を訪ねる源氏が道すがらに担桶の田子を見て、見舞った御息所に季節柄の挨拶として其の話を持ち出す、ような描写に整合性を持たせる事は容易そうに思えるが、過剰描写を嫌って作者は避けたのだろうか。と言うより寧ろ、この歌を出す事で其れ位の事が在ったらしいと読者が考える事まで作者は計算済みなのか。尤も、是は作者の計算高さというよりは、当時の人の感覚と現代人との感覚の差によるズレかもしれない。当時の人にとっては分かりきった事で言うまでも無い事が、今となっては謎だらけという事情。大体が基本構文自体で、作者の意図は兎も角、主語省略文は今となっては関数式扱いで尊敬・謙譲の演算子や文法・文脈の方程構式から「解」を求めるという、一種の暗号めいた日本語で書かれた数式文の趣になっていて、皮肉にも是がこの物語の今日性とも成っている気配。それだけに間違いもしやすく、厄介な事に其の間違いまで或る程度許容されてしまう。一寸したブラックボックスの面白さ。其の罠にまんまと私も嵌ってしまったのだろうか。イヤイヤ、気を取り直して進めよう。さて「注」にも「こひぢ」を「小泥(泥濘ヌカルミ)」と「恋路」に掛けてあると在ったが、其処が之の歌の主たる趣なのだろう。他にも「たごのみづからぞうき」を「田子の自らぞ泥土(農夫は進んで水田に入る)」と「担桶の水からぞ憂き(担ぎ桶の水が掛かって嫌になる)」と上手く言葉遊びを仕上げている。A面は「袖が濡れる泥濘だということは分かっていても、仕事なので農夫は進んで水田に入る」という所で、今の初夏は陰暦四月なら田植えの頃、梅雨明けで夏の中干しを経て、秋なら刈入れの風景画。B面は「泣きを見る恋の先行きを片隅で気付きながらも、つい足を滑り込ませて冷や水を浴びせられる」と、艶な相聞歌。「袖濡るる」も「且つ」も「知る」も「下り立つ」も実に多彩に複意のある語用を操る。

『*山の井の水』もことわりに(濡れ損ですから)」とぞある(と返書で歌を贈りなさいます)。

*注釈に≪『源氏釈』は「悔しくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」(古今六帖、山の井)を指摘。源氏の心の浅さを非難の意を込める。≫とある。引歌の「山の井」は「若紫」巻の源氏と尼上との贈答歌にも＜浅い井

＝薄い意＞として引かれていた。「山の井戸」が驚くほど底が浅くて、水は汲み難いが袖は濡らし易かった事から＜誘い水に呼応したら遊ばれただけで泣きを見た＞という、当時にして既に百年前の古典だったらしい。

「御手は(おんては、字筆の見事さは)、なほここらの人のなかに(やはり愛人の中でも)すぐれたりかし(特に優れている)」と見たまひつつ(と源氏は御息所の文を御覧になりながら)、

「いかにぞやもある世かな(難しい世の中だ)。心も容貌も、とりどりに捨つべくもなく(其々に見所があって)、また思ひ定むべきもなきを(それだけに一人に絞り切れないのだから)」。苦しう思さる(悩ましく御思いに為る)。

御返り(贈歌への御返歌を認めた源氏から御息所への御返書は)、いと暗うなりにたれど(大分夜更けになってしまいましたが)、「袖のみ濡るるや(袖だけが濡れるとは)、いかに(どういう事なのでしょう)。深からぬ御ことになむ(思いが深く無いという事になります)。

浅みにや人はおりたつわが方は、身もそほつまで深き恋路を　(和歌 9-8)

貴方が浅瀬という恋の、深みに溺れた遣る瀬無さ　(意訳 9-8-1)

言い訳などではありません、今夜が山の看病です　(意訳 9-8-2)

*是は直接には御息所が源氏の薄情を「袖濡るる」と詠んだ恨み節に対して、「袖のみ濡るるや」と前置きして其れは「浅みにや人はおりたつ(貴方が浅瀬に居る)」からなのだ、と切り返した形に為っている。しかし、源氏が夕方に送った文に対して御息所が恨み節を返して来た事で、御息所が源氏の文を無沙汰の言い訳と思っている事を源氏は知った。だから源氏としては、形式的にでも先の文は言い訳では無いと、更に言い訳を重ねる必要があった。「御返りいと暗うなりにたれ」たのは弁明の演出でもあるのだろう。その意味でも「浅みにや人はおりたつ(貴方は見え透いた言い訳と仰いますが)」と詠み出している。そして「我が方は身も濡つまで更かき乞ひ冶を(私は汗まみれで夜更けまで祈祷に打ち込んでいます)」と言い切った上で、次の句を続ける。

*おぼろけにてや(妻が重篤なので)、この御返りを、*みづから聞こえさせぬ(直接出向いて自分の口でお伝えする事が出来ません)」などあり(などと在りました)。　*「おぼろけに」の語は先の夫人の容態を「おぼろけのものにあらず(並大抵のものではない)」と記した事に通じると考える。 *「みずから」の語は御息所の歌にあった「みづからぞうき(進んで難儀を被る)」を受けて、更に其れを打ち消して＜然うする事さえ出来ない＞と言い訳の上塗りを試みているのだろう。

[第三段　葵の上に御息所のもののけ出現する]

大殿には(夫人には)、御もののけいたう起こりて(悪霊が酷く取り付いて)、いみじうわづらひたまふ(大変にお苦しみ為さる。それについての風評に、)。

「*この御生きすだま(この私の生霊や)、故父大臣(こちちおとど、亡き大臣)の御霊(ごりゃう、死霊)など言ふものあり(などの祟りではないかと言う者が居る)」　*「この」は自問文で「私」。それに「御おん」が付くのは、「言ふもの」の言い方を準った臨場感か。注には≪御息所の聞いた噂。「この」は御息所をさす。「故父大臣」とは御息所の父大臣。『完訳』は「父大臣が左大臣を恨んで死んだとも読める。政治的敗北者か」

と注す。次の「賢木」巻に御息所の父が大臣であったと語られる。≫とある。今さら驚かないが、六条御息所はある時期は勢力の在った藤原諸氏の娘で、時の皇太子妃となり、皇太子の早世により源氏の愛人になっていた、ということらしい。才色兼備の人に描かれていて、如何にも不運とも思えるし、それでも傍目には惨めさが見え無いほどの華やかさを纏っていたらしく、それが何とも悲しい。

と聞きたまふにつけて(と御息所はお聞きになって)、思しつづくれば(符と其れに付いて考えて御覧になると)、

「身一つの憂き嘆きよりほかに(自分の不幸を嘆く他に)、人を悪しかれなど(人に災いを起こそうなどと)思ふ心もなけれど、もの思ひに(悩みが昂じて)飽く離るなる(あくがるなる、体を離れた)魂は、さもやあらむ(そんな事もするかも知れない)」と思し知らるることもあり(と思い当たる節が無きにしも非ずでした)。

年ごろ(数年来)、よろづに思ひ(悩み多く)残すことなく過ぐしつれど(余裕の無い暮らしぶりだったが)、かうしも砕けぬを(此処まで心を砕かれた事はかつて無かったものを。)、はかなきことの折に(つまらない場所取り争いで)、人の思ひ消ち(夫人が思慮も無く)、なきものにもてなすさまなりし(蔑ろに応対した形となった)御禊の後(みそぎののち、禊見物の日の後は)、

ひとふしに(其れに拘り続けて)思し浮かれにし心(浮遊した魂が)、鎮まりがたう思さるるけにや(抑え切れない怨恨を抱いてだろうか)、すこしうちまどろみたまふ夢には(うとうとした夢の中で)、かの姫君とおぼしき人の、いときよらにてある所に行きて(お清めの祈祷を受けている所に行って)、とかく引きまさぐり(手当たり次第に引き掻き回して)、

うつつにも似ず(普段の自分とはまるで違って)、猛けく厳き奮る(たけくいかきひたぶる、荒々しく無骨で激しい)心出で来て(気持ちが形に成って現れて)、うちかなぐるなど(辺り構わず暴れまわる自分の姿を)見えたまふこと(御覧に成る事が)、度かさなりにけり(度重なりました)。

「あな、心憂や(何と情けない)。げに(やはり自分が)、身を捨ててや(幽体離脱で)、往にけむ(いにけむ、姫に取り憑いていた様だ)」と、うつし心ならず(夢か現か分からずに)おぼえたまふ折々もあれば(御思いに為る時もあるので)、

「さならぬことだに(それ程の事でなくても)、人の御ためには(自分の好奇心で)、よさまのことを(余所様の事を)しも言ひ出でぬ(然も大袈裟に言い立てる)世なれば、ましてこれは、いとよう言ひなしつべき(尾鰭端鰭を付けやすい)たよりなり(格好の話種になる)」と思すに(と御思いになれば)、いと名たたしう(直ぐ噂が立ちそうで)、

「ひたすら世に亡くなりて(亡くなってしまってから)、後に怨み残すは世の常のことなり。それだに(そうした死後でさえ怨霊などとは)、人の上にては(その人の名誉を)、罪深うゆゆしきを(傷付ける忌まわしさなのに)、うつつのわが身ながら(生きながら)、さる疎ましきことを(虐げられた怨念深さを)言ひつけらるる宿世の憂きこと(言い立てられる因縁の何と辛い事か)。

すべて(もう一切)、つれなき人に(薄情者の源氏などに)いかで心もかけきこえじ(何で思いを寄せ申すものか)」と思し返せど(と御息所は改めて御思いに成ったが)、*思ふもものをなり(そんな事を考える事自体が忘れていないということなので、これも何度目の御決意だったことでしょうか)。　*注釈に≪『奥入』は「思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじやなぞ」（出典未詳）を指摘。≫とある。「思わないと思う事自体が思っていて、思っていなければ思わないとも思わない」とは、今でも使う言い回し。

［第四段　斎宮、秋に宮中の初斎院に入る］

斎宮は、*去年内裏に入りたまふべかりしを、さまざま障はることありて、この秋入りたまふ。*注釈に≪齋宮は卜定されると、まず賀茂川で御禊をし、次いで宮中の初齋院に入る。そこでおよそ一年を過ごし、翌年の秋に二度めの御禊を行い、嵯峨野の野宮に移る。そして翌年の秋九月に伊勢へ向かう。齋宮は卜定から伊勢下向までおよそ足掛け三年ある。≫とある。「去年(こぞ)」とあるが、斎院は既に二度目の御禊を済ませて紫野に移っている筈で、同時期の選任なら斎宮も「去年」に初斎院入りして「今年」は野宮に入り給う可経りし、なのかとも思うが、「さまざま障はることありて」ならば、こうした段取りも在り得るのかも知れない。ただ、「障はること」が不幸や不実なら斎宮自体が交代するかとも思うが、斎宮や朝廷の事情で無いなら暦や方角の都合だったのか明示は無く、むしろこの日程は原文から学ぶ以上の手蔓は無い。

*九月(ながつき、長月)には、やがて野の宮に移ろひたまふべければ、ふたたびの御祓へ(おはらへ、御禊)のいそぎ(の準備を)、とりかさねてあるべきに(引き続いてしなければ為らないというのに)、ただあやしうほけほけしうて(御息所はただ虚ろに呆然として)、つくづくと臥し(横に為ったまま)悩みたまふを(物思いに耽って御出でなのを)、宮人(御所の世話人が)、いみじき大事にて(ひどく穢れを心配して)、御祈りなど、さまざま仕うまつる(御用いたします)。　*やはり斎宮は今年の九月に野宮に移るらしい。となると、前行に在った「この秋」を七月と見ても内裏での初斎院は二ヶ月と無い慌しさだ。何か意外。

おどろおどろしきさまにはあらず(御息所は苦しみ回るという事は無くて)、そこはかとなくて(ただ力なく)、月日を過ぐしたまふ。大将殿も、常にとぶらひきこえたまへど(お見舞いの文と品は欠かさずお出し申しなさったが)、まさる方の(身重の正妻が)いたうわづらひたまへば(重い症状なので)、御心のいとまなげなり(出向く暇はありませんでした)。

まださるべきほどにもあらずと、皆人もたゆみたまへるに、にはかに御けしきありて(夫人は急に産気づいて)、悩みたまへば(お苦しみになったので)、いとどしき御祈り(験者挙げての祈祷を)、数を尽くしてせさせたまへれど(有らん限りに尽くさせ為されたが)、例の執念き(しふねき、執念深い)御もののけ一つ、さらに動かず、やむごとなき験者ども(法力の有る僧達でさえ)、めづらかなりと(これ程の霊は見た事が無いと)もてなやむ(苦労していました)。さすがに(それでも)、いみじう調ぜられて(悪霊は多くの僧の念力に押さえ込まれて大人しくなったので)、心苦しげに泣きわびて(夫人は弱々しく涙ながらに)、

「すこしゆるべたまへや(少し除霊を緩めてください)。大将に聞こゆべきことあり(殿に御話ししたい事があります)」とのたまふ(と述べなさいます)。

「さればよ(殿に御話しとは)。あるやうあらむ(余程の事だろう)」とて(と側仕えの女房が)、近き御几帳のもとに(枕元の几帳の中に源氏を)入れたてまつりたり(お入れ申し上げました)。

むげに限りのさまにものしたまふを(夫人はもう是で最期かというお姿で)、聞こえ置かまほしきことも(源氏に御遺言申し上げて置きたい事も)おはするにやとて(御在りなのかと)、大臣も宮もすこし退き給へり(しりぞきたまへり、遠慮為された)。加持の僧ども、声しづめて(声を低くして)法華経を誦みたる(よみたる)、いみじう尊し(とても荘厳であった)。

御几帳の帷子(かたびら)引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて(とても美しく)、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに(誰だろうと)、見たてまつらむに(是を拝見すれば)心乱れぬべし(感動した事だろう)。

まして惜しう悲しう思す(まして良人の源氏が夫人を愛しく労しく御思いに為るのは)、ことわりなり(当然です)。白き御衣に、色あひいとはなやかにて(顔色は紅潮して)、御髪の(みぐしの)いと長うこちたきを(とても長くて手入れが大変なものを)、引き結ひてうち添へたるも(束ねて片付けている夫人のお産姿を源氏は)、

「かうてこそ(こうしていると)、らうたげに(美しさに)なまめきたる方添ひて(瑞々しさが加わって)をかしかりけれ(何とも素晴らしい)」と見ゆ(と思う)。御手をとらへて、

「あな、いみじ(何と労しい)。心憂きめを見せたまふかな(悲しませないで下されよ＝決して死んでは為りません、気を強くお持ち下され)」

とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう(いつもはひどく余所余所しく)恥づかしげなる御まみを(逸らしがちな眼差しを)、いとたゆげに見上げて(とても難儀そうに見上げて)、うちまもりきこえたまふに(源氏を見つめ申しなさる夫人が)、涙のこぼるるさまを(涙を零す姿を)見たまふは(御覧になれば)、いかがあはれの浅からむ(源氏もどれほど情愛を深く感じた事でしょう)。

あまりいたう泣きたまへば(夫人が余りにひどく御泣きに為るので源氏は)、「心苦しき親たちの御ことを思し(心配を掛けた親たちを思い)、また、かく見たまふにつけて(こうして私と会っていなさると)、口惜しうおぼえたまふにや(病苦を悔しくお思いなのだろう)」と思して(と御考えに為って)、

「何ごとも、いとかうな思し入れそ(余り思い詰めなされませるな)。さりともけしうはおはせじ(そこまで絶望する事は有りません)。*いかなりとも(万一の事があっても)、かならず逢ふ瀬あなれば(必ず一緒に成る宿命なので)、対面はありなむ(彼の世でも会えるから寂しがらないで下さい)。大臣、宮なども、深き契りある仲は(深く結ばれた宿縁は)、めぐりても絶えざなれば(生まれ変わっても続くのだから)、あひ見るほどありなむと思せ(いつまでも一緒に居るとお思い下さい)」と、慰めたまふに(と慰めなさると)、　*こうした輪廻転生の概念は当時では最高学府で修めた深遠な思索で、この場面でも真摯な響きを持っていたのだろう。今日では「転生」も一つの考え方と言う位の位置づけで、こうした抹香臭い言い方は冗談めかして使って丁度その意図が伝わる嫌いだが、此処は大真面目な場面。

「いで、あらずや(いえ、そうではありません)。身の上のいと苦しきを(法力の縛りで身動きが出来ないので)、しばしやすめたまへと(暫く祈祷を休めてくださいと)聞こえむとてなむ(申し上げたまでなのです)。かく参り来むともさらに思はぬを(このように乗り移る気などさらさら無いのに)、もの思ふ人の魂は(思い詰めた怨念は)、げにあくがるるものになむありける(本当に体を抜け出て浮遊してしまうものなのですね)」と、なつかしげに言ひて(親しげに話して)、

「嘆きわび空に乱るるわが魂を、結びとどめよ下交への褄」(和歌 9-9)

「嘆き彷徨う魂は、情けばかりに縛られる」(意訳 9-9)

*「下交への褄(したがへのつま)」は＜下前になる着物の右裾＞で、「結びとどめよ」という言い方で＜しっかり着付ける＞と身繕いめかした洒落言葉。訴えは「従がへの妻」だから＜私を妻として従がえて＞で、「結びとどめよ」が＜しっかり抱き止めて下さい＞となって、「嘆きわび空に乱るるわが魂を(空しく泣き狂う真心を)」となる。

とのたまふ声(と言いなさる声や)、けはひ(気配は)、その人にもあらず(既に夫人では無く)、変はりたまへり(別人になっていた)。「いとあやし(何者か)」と思しめぐらすに(と源氏が考えてみれば)、ただ(他ならぬ)、かの御息所なりけり。

あさましう人のとかく言ふを(あさましくも他人が御息所を化け物扱いしても)、よからぬ者どもの(心ない者たちが)言ひ出づることも(言い立てる事と)、聞きにくく思して(源氏は聞き苦しく御思いに為って)、のたまひ消つを(打消して来られたのを)、目に見す見す(こうもまざまざと見せ付けられては)、「世には(世の中には)、かかることこそはありけれ(こんな事もあったのか)」と、疎ましうなりぬ(嫌気が差した)。

「あな(何と)、心憂(こころう、おぞましい)」と思されて(と御思いに為って)、「かくのたまへど(そう仰るが)、誰とこそ知らね(誰だか分かりません)。たしかにのたまへ(はっきり御名乗り下さい)」とのたまへば(と源氏が念を御押しになると)、

ただ(正に)それなる(御息所そのままの)御ありさまに(御姿に)、あさましとは世の常なり(嗜みが無いあさましさなどという世間の言い方では間に合わない、体面に押し潰された宮家の悲しみが其処に漂っていました)。人々近う参るも(女房たちが異変に気付いて近くに寄ってくるのも)、かたはらいたう思さる(源氏は何を気取られるかと気が気でなく感じておられました)。

[第五段　葵の上、男子を出産]

すこし御声もしづまりたまへれば(夫人の呻き声が少し静かに御なりなので)、隙おはするにやとて(一呼吸置かれたかと)、宮の御湯持て寄せたまへるに(母上が御薬湯を持って来させなさったので)、かき起こされたまひて(夫人は抱き起こされなさって)、ほどなく生まれたまひぬ(其の後に直ぐ御子がお生まれに成りました)。

うれしと思すこと限りなきに(源氏の喜びはこの上なかったが)、人に駆り移したまへる御もののけども(修験僧たちが人型に追い移しなさった悪霊たちが)、ねたがりまどふけはひ(禍し損な

って幸を妬んで悔しがる霊気が)、いともの騒がしうて(ひどく昂って)、後の事(後産、胎盤落しが)、またいと心もとなし(またずいぶん心配された)。

言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや(家を挙げて言い尽くせないほどの願文の数々を立てさせなさった顕れか)、たひらかに事なり果てぬれば(無事に後産も済まされて)、山の座主(やまのざす、比叡山座主)、何くれやむごとなき僧ども(その他の何某かの高名な僧たちは)、したり顔に汗おしのごひつつ(一仕事し終えた充実感を浮かべた顔つきで汗を拭いつつ)、急ぎまかでぬ(早々に部屋を退出しました)。

多くの人の心を尽くしつる(多くの家人が心配して熱心に看病した)日ごろの名残(数日来の緊張の余韻が)、すこしうちやすみて(少し緩んで)、「今はさりとも(もう心配ないだろう)」と思す(と源氏は御両親ともども御思いに為ります)。

御修法などは(産後のご回復を願っての祈祷は)、またまた始め添へさせたまへど、まづは、興あり(お目出度事であり)、めづらしき御かしづきに(可愛い赤子のお世話に)、皆人ゆるべり(皆頬を綻ばせていました)。

院をはじめたてまつりて(院をはじめ勿体無くも)、親王たち、上達部、残るなき(盛大な)*産養(うぶやしなひ、誕生祝い)どもの、めづらかにいかめしきを(沢山の贈り物と其の立派さを)、夜ごとに見ののしる(連夜讃えて宴を開きました)。男にてさへおはすれば(男の子でさえあったので)、そのほどの作法(其の時の儀式は)、にぎははしくめでたし(殊に派手で賑やかでした)。

*「産養」は≪出産後３日・５日・７日・９日目の夜に、親類が産婦や赤子の衣服、飲食物などを贈って祝宴を開くこと。また、その贈り物。平安時代、貴族の家で盛んに行われた。現在の「お七夜の祝い」はこの名残。(大辞泉)≫とある。「残るなき」は其の夜毎の全てに余す所なく執り行われた、という盛大さかと思う。

かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず(心穏やかではありませんでした)。「かねては、いと危ふく聞こえしを、たひらかにもはた(安産だったとは、何と無念な)」と、うち思しけり(憎しみを募らせなさりました)。

あやしう(呆然と)、我にもあらぬ御心地を(自分が自分でないような感触を)思しつづくるに(覚えながら)、御衣なども(衣服なども)、ただ*芥子の香に染み返りたるあやしさに(すっかり焚き護摩の香が染み付いてしまっている不思議さに)、御ゆする参り(おんゆするまゐり、洗髪をして)、御衣着替へ(おんぞきかへ)などしたまひて、試みたまへど(消そうとなされても)、　*「芥子の香(けしのか)」はケシの種を護摩を焚く時に用いたので、其の移り香。「護摩」は「《(梵)homa の音写。焚焼(ふんしょう)・火祭りの意》密教で、不動明王や愛染(あいぜん)明王などの前に壇を築き、火炉(かろ)を設けてヌルデの木などを燃やして、煩悩(ぼんのう)を焼却し、併せて息災・降伏(ごうぶく)などを祈願する修法。(大辞泉)」とあって、左大臣家の姫君の病気平癒と安産祈願の為に行われた除霊祈祷である。

なほ同じやうにのみあれば(依然として消えないので)、わが身ながらだに疎ましう思さるるに(我ながら訝しいのに)、まして、人の言ひ思はむことなど(他人が何を言い立てて如何思うかと考えれば)、人にのたまふべきことならねば(とても誰かに相談できる事では無く)、心ひとつに

思し嘆くに(自分の胸の中だけでお悩みになるので)、いとど御心変はりもまさりゆく(ますます狂気が募って行きます)。

大将殿は、心地すこしのどめたまひて(気持ちを少し落ち着かせなさって)、あさましかりしほどの問はず語りも(夫人の枕元での御息所の怨霊と対面した際に聞いた声も)、心憂く思し出でられつつ(おぞましく思い出されなさりつつ)、

「いとほど経にけるも心苦しう(余り長く途絶えたままでは気が引けるが)、また(そうかといって)気近う見たてまつらむには(直接御目に掛かる気には)、いかにぞや(とても為れない)。うたておぼゆべきを(気味悪さが先に立ってしまうし)、人の御ためいとほしう(其れでは相手にも失礼になるだろうし)」、よろづに思して(そんな風にあれこれ考えた末に)、御文ばかりぞありける(殿は六条に手紙だけを差し上げました)。

いたうわづらひたまひし(お産でひどくお苦しみになった)人の御名残ゆゆしう(夫人のご回復が)、心ゆるびなげに(思わしくなく油断ならないと)、誰も思したれば(御両親が心配して御出でなので)、ことわりにて(尤もな事と)、御歩きもなし(殿も夜遊びに出歩かれません)。

なほいと悩ましげにのみしたまへば(夫人は依然として酷く辛そうにばかりして御出でなので)、例のさまにてもまだ対面したまはず(殿は普段のようにはまだ御会いなさりません)。

若君のいと(若君の度を越して)ゆゆしきまで(不吉なほど)見えたまふ御ありさまを(美しいお姿を)、今から、いとさまことにもてかしづき(とても特別扱いをして大事に為さって)きこえたまふさま(いらっしゃるような源氏の御様子に)、おろかならず(娘との婚儀が仮初ではない)、ことあひたる心地して(名実共に正式の夫婦となった実感を得て)、大臣もうれしういみじと(左大臣も本当に嬉しく)思ひきこえたまへるに(御思いのようだったが)、

ただ、この御心地おこたり果てたまはぬを(当の夫人の御気分が一向に回復なさらないのが)、心もとなく思せど(気掛かりでいらして)、「さばかりいみじかりし名残にこそは(あれほど苦しんだ後だから、そう直ぐには良くならないのだろう)」と思して(と御思いに為って)、いかでかは(心配は心配だが)、さのみは心をも惑はしたまはむ(それほど深刻に思い詰めなさる事は有りませんでした)。

若君の御まみのうつくしさなどの、春宮にいみじう似たてまつりたまへるを、見たてまつりたまひても、まづ(やはりつい)、恋しう思ひ出でられさせたまふに(源氏は実の子であり表向きは弟宮となる東宮を懐かしくお思い出し為されて)、忍びがたくて(御会いしたさに)、参りたまはむとて(御所へ参りなさろうとして)、

「内裏などにも(御所にも)あまり久しう参りはべらねば(余り永く参上致しませんと)、いぶせさに(不都合も出て来ますので)、今日なむ(今日という日は)初立ち(うひだち、産後初の外出を)しはべるを(致しますので)、すこし気近きほどにて聞こえさせばや(少しでも直接御会いして御挨拶させて下され)。あまりおぼつかなき御心の隔てかな(取次ぎではもどかしいので)」と、恨みきこえたまへれば(源氏が夫人に女房から訴え申しさせなさると)、

「げに(確かに)、ただひとへに(ただ単に)艶にのみあるべき(艶事で遊ぶだけの)御仲にもあらぬを(御仲でもないのに)、いたう衰へたまへりと言ひながら(酷く御窶れと言っても)、物越にてなどあべきかは(物越しなど他人行儀に過ぎましょう)」とて、臥したまへる所に(夫人の枕元に)、御座(おまし、源氏の御座を)近う参りたれば(女房が近くに用意したので)、入りてものなど聞こえたまふ(源氏は几帳の中に入って御話しなさいます)。

御いらへ、時々聞こえたまふも、なほいと弱げなり。されど、むげに亡き人と思ひきこえし(最早今際の人かと思い致した)御ありさまを思し出づれば(お産直前の夫人の様子を思い出せば)、夢の心地して(こうして生きて御出での事が夢のようで)、ゆゆしかりしほどのことどもなど(夫人が大層お苦しみだった時の様子などを)聞こえたまふついでにも(御話しなさる内に)、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが(あの既に息も絶えたかのような容態から)、引き返し(息を引き返したかと思うと)、

つぶつぶとのたまひしことども(人が変わったようにぼつぼつと気味悪く話し始められた事が)思し出づるに(思い出されてきて)、心憂ければ(源氏は暗然として)、

「いさや(さて)、聞こえまほしきことといと多かれど(御話ししたい事はまだ沢山有りますが)、まだいとたゆげに思しためればこそ(まだ随分だるそうに御思いのようですから)」とて(と言って話を切り上げて)、

「御湯参れ(お薬を持って参れ)」などさへ(と女房に命じなさるまで)、扱ひきこえたまふを(御世話申しなさるのを)、いつならひたまひけむと(いつそんなお世話を覚えなされたのかと)、人々あはれがりきこゆ(女房たちは感心していたようでした)。

いとをかしげなる人の(とても美しい夫人が)、いたう弱り損なはれて(そこなはれて、ひどく衰弱して)、あるかなきかのけしきにて(生死を彷徨って)臥したまへるさま(横に御成りの姿は)、いとらうたげに(とても労しく)心苦しげなり(胸が詰まった)。

御髪の乱れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕のほど、ありがたきまで見ゆれば(実に美しく見えたので)、「年ごろ(この数年来)、何ごとを飽かぬことありて(この人に何が不足が有ると)思ひつらむ(私は思ってきたのだろう)」と(と源氏は)、あやしきまで(食い入るように)うちまもられたまふ(夫人を見つめなさいます)。

「院などに参りて、いととうまかでなむ(もう直ぐに帰ってきます)。かやうにて(このように)、おぼつかなからず(直接)見たてまつらば(御会いできれば)、うれしかるべきを(嬉しいのですが)、宮のつとおはするに(この病室では母君がいつも付いて御出でなので)、心地なくやと(お邪魔かと)、つつみて過ぐしつるも苦しきを(遠慮してきましたのも物足りないので)、なほやうやう(やはり少しづつでも)心強く思しなして(ご回復なさって)、例の(普段の)御座所(おましどころ、居間)にこそ(でこそ、お過ごしください)。

あまり若くもてなしたまへば(いつまでも甘えていらっしゃると)、かたへは(母上は)、かくもものしたまふぞ(ずっと子ども扱いなさいますよ)」など、聞こえおきたまひて(申し置き為され

て)、いときよげに(とても綺麗に)うち装束きて(うちさうぞきて、外出着を整えて)出でたまふを(源氏がお出掛けなさるのを)、常よりは目とどめて(夫人はいつに無く目を凝らして)、見出だして臥したまへり(お見送りしながら臥して居らした)。

[第六段　秋の司召の夜、葵の上死去する]

*秋の司召(つかさめし、定期昇進が)あるべき定めにて(行われる予定なので)、大殿も参りたまへば(左大臣は勤務評価の大事なお役目で参内なさいますが)、君達も*労はり(いたはり、実績申告して)望みたまふことどもありて(其々に望む昇進がおありなので)、殿の御あたり離れたまはねば(大臣に付いて訴えなさるので)、皆ひき続き出でたまひぬ(皆が父上に引き続いて御所へお出掛けになります)。　*「秋の司召」は≪八月に行われる中央官の人事。なお、春には地方官の任命が行われる。≫と注釈に有る。　*「労はり」は≪『完訳』は「自分の功労を申し立てて官位の昇進を望むこと。大臣らがそれを聞いて任免を勘案する」と注す。≫との事。

殿の内(左大臣邸に)、人少なにしめやかなるほどに(人影が減って鎮まりかえる頃)、にはかに例の御胸をせきあげて(夫人が急にいつもの症状で御胸を咳き込まれて)、いといたう惑ひたまふ(とてもひどくお苦しみになりました)。内裏に御消息聞こえたまふほどもなく(御所に異変をお伝えしようかとしている内に)、絶え入りたまひぬ(亡くなってしまわれた)。

足を空にて(気が迷って足が地に付かないまま)、誰も誰も(左大臣家一同が挙って)、まかでたまひぬれば(退出なされたので)、*除目の夜(ぢもくのよ、任官式が行われる夜)なりけれど(の事だったが)、かくわりなき御障りなれば(このような急の穢れで差障りが在ったので)、みな事破れたるやうなり(万事ご破算といった所だった)。　*「除目」の≪「除」は故官を除く意、「目」は新官を目録する意(小学館古語辞典)≫とあり、≪大臣以外の諸官職を任命する中古の儀式(同左)≫とある。

ののしり騒ぐほど(葬儀の段取りで大騒ぎとなったのが)、夜中ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都たちも(誰それと言った高僧たちも)、え(とても)請じ(しゃうじ、呼び招こうにも)あへたまはず(間に合いません)。

今はさりともと思ひ(今はどうやら夫人の容態が収まってきたようだと思い)たゆみたりつるに(油断していた所の)、あさましければ(急変だったので)、殿の内の人(左大臣家では誰もが)、ものにぞあたる(動けば物に当たる慌てぶりだった)。

所々の御とぶらひの使など(彼方此方から御弔問の使いが遣ってきて)、立ちこみたれど(立て込んだが)、え聞こえつかず(とても取次ぎなど出来ず)、ゆすりみちて(皆が肩を揺らして泣く)、いみじき御心惑ひども(邸内に満ちた激しい嘆き悲しみは)、いと恐ろしきまで見えたまふ(もう恐ろしいほどの様相でした)。

御もののけのたびたび取り入れたてまつりしを思して(物の怪が度々取り憑き致し以前も何度か仮死状態に御成りだった事を考えて)、御枕などもさながら(枕も其の儘にして)、二、三日見たてまつりたまへど(二、三日生還するかと様子を見参うし為されたが)、やうやう変はりたまふ

ことどものあれば(遺体が腐り始めなさるので)、限りと思し果つるほど(今は此れまでと諦める他はなく)、誰も誰もいといみじ(皆、悲嘆した)。

大将殿は、悲しきことに(夫人の死の悲しみの中で)、*ことを添へて(更に加えて御息所の怨念を目の当たりにして)、世の中を(男女の仲を)いと憂きものに思し染みぬれば(つくづく面倒なものと身に沁みて思いなさったので)、*ただならぬ御あたりの弔ひどもも(思いを寄せた御相手筋からのお弔いの数々も)、心憂しとのみぞ(疎ましいとだけ)、なべて思さるる(総じて御思いに為りました)。　*「ことを添へ」は≪『集成』は「（葵の上の死という）悲しいことに、（御息所の生霊という）厭わしいことが加わって」と注す。≫と注釈にある。　*「ただならぬ御あたり」は注に≪『完訳』は「愛人関係にある方々」と注す。≫とある。文の筋から肯けるので、その意で言い換える。

院に、思し嘆き(院に於かれても御嘆き下さり)、弔ひきこえさせたまふさま(御弔問を遣わし下さるとの事に)、かへりて面立たしげなるを(却って面目を施せるかと)、うれしき瀬もまじりて(嬉しい気持ちも混じって)、大臣は御涙のいとまなし(父上は涙の乾く暇もない)。

人の申すに従ひて(人の進言に縋って)、いかめしきことどもを(荘厳な祈祷を)、生きや返りたまふと(生き返りを願って)、さまざまに残ることなく(父君は色々お試し為されたが)、

かつ(其の反面で)損なはれたまふことどものあるを見る見るも(遺体が見る見る損なわれていく有様に)、尽きせず思し惑へど(諦めきれないままに)、かひなくて*日ごろになれば(無残なばかりに数日が過ぎれば)、いかがはせむとて(他に為す術も無く)、鳥辺野に率て奉るほど(とりべのにゐてたてまつるほど、鳥辺山の火葬場にお連れ参うし上げる時は)、いみじげなること(万感胸に迫る事)、多かり。　*注釈に≪葵の上の死は八月十四日(「御法」巻)、葬送は二十余日で、その間七、八日くらいある。≫とある。後述先取りは幾分興醒めなるも、有用なノート。

[第七段　葵の上の葬送とその後]

こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もなし。院をばさらにも申さず、后の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも参りちがひて(其れに続く諸家からの使いが入れ替わり参り来て)、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ(引きも切らず悲しみの御弔問を申し上げなさいます)。大臣はえ立ち上がりたまはず、

「かかる齢の末に、若く盛りの子に後れ奉りて(おくれたてまつりて、先立たれて)、*もごよふこと(地を這うばかりに力が抜けて腰も立たない)」と恥ぢ泣きたまふを、ここらの人悲しう見たてまつる(周りの者は御同情申し上げます)。　*「もごよふ」は＜うねって行く、のたくる、足腰が立たず腹ばいになって行く。＞と古語辞典にある。今では使わない語だが、「もがく」の類語にも見えるし、「もぐ(突起が欠ける＝手足鼻や果実などを千切り取る)」からの展開のようにも見える。

*夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど(夜通し掛けての盛大な葬儀だったが)、いともはかなき(詰まりは無残な)御屍(おんかばね、御遺骨)ばかりを御名残にて(だけを御標として)、暁深く(夜明け前早くに)帰りたまふ(会葬者は帰途に着きました)。　*注釈に≪当時の葬儀は夕方に

野辺送りして一晩中かけて荼毘にふし、明け方に遺骨を拾って帰る。漆黒の闇夜を焦がす火葬の炎と煙そして帰りがけの朝露は葬儀に参列した人々には心に深く残る。≫とある。本文に優るほどの情緒深い「注」である。

常のことなれど(葬送は世の常だが)、*人一人か(源氏は他には、せいぜい夕顔一人か)、あまたしも見たまはぬことなればにや(今までそう多くはお見送りなさらなかった事なので)、類ひなく思し焦がれたり(荼毘の煙にかつて無いほど追想の胸を御焦がしになりました)。　*「ひとひとり」については≪『集成』は「（人の死に目に遭うのは）一人ぐらいか、その程度で、多くは経験なさらぬことだからであろうか。源氏は今まで、三歳の時に母、六歳の時に祖母に死別しているが、直接死に目に遭ったのは夕顔だけである」と指摘する。≫と注釈にある。

八月二十余日の有明なれば、空もけしきもあはれ少なからぬに、大臣の闇に暮れ惑ひたまへるさまを見たまふも、ことわりにいみじければ(その悲しみが察せられて身に沁みたので)、空のみ眺められたまひて(源氏も帰りの車中で空ばかり眺めていらして)、

「のぼりぬる煙はそれとわかねども、なべて雲居のあはれなるかな」(和歌 9-10)

「煙は雲に紛れても、何れ涙の空模様」(意訳 9-10)

殿におはし着きて(と御詠みなさって、左大臣宅に帰り着いても)、つゆまどろまれたまはず(少しもお眠りに為れません)。年ごろの御ありさまを思し出でつつ、

「などて(どうして)、つひにはおのづから見直したまひてむと(最後は妻の方から頑なな態度を改めてくれるだろうと)、のどかに思ひて(呑気に考えて)、なほざりのすさびにつけても(場当たりの夜遊びで)、つらしとおぼえられたてまつりけむ(薄情者と思われるような事をし申してしまったのだろう)。

世を経て(一緒に成っていた間中)、疎く恥づかしきものに思ひて(わだかまりを持って心を隔てたまま打ち解ける事が出来ない内に)過ぎ果てたまひぬる(亡くなってしまったとは)」など、悔しきこと多く、思しつづけらるれど、かひなし。

*鈍める御衣(にばめるおんぞ、喪服を)たてまつれるも(お召しになっても)、夢の心地して(どこか絵空事のように思えて)、「われ先立たましかば(私が先立っていたら)、*深くぞ染めたまはまし(妻はもっと深く染めた喪服を着たのだろう)」と、思すさへ(などと御思いに成って)、
*「鈍色(にびいろ)」は「薄墨色(うすづみいろ)」だというが、およそ＜灰色＞の事らしい。　*この記述からすると、良人に先立たれた妻の喪服は色が濃かった、らしい。あらためて、正式の夫婦であった重さを噛み締めた、のだろう。ただ、気持ちの深さを掛けているとしたら、少し引く。

「限りあれば薄墨衣浅けれど、涙ぞ袖を淵となしける」(和歌 9-11)

「薄墨色の麻衣、涙で滲む藤衣」(意訳 9-11)

*喪服の色は立場や故人との関係によって違う定めが在った様で、時代によっても相当違うらしい。また喪服は華美を避ける質素な服なので、粗末な麻の皮や藤の皮で作った服と言う意味で、実際は絹製であっても〈喪服〉の呼び名

として「藤衣(ふじごろも)」や「麻衣(あさごろも)」を用いたらしい。其れが「浅けれど(麻なのに)」「淵となし(藤になる)」という洒落言葉を成立させている。歌の筋は「決まり事なので喪服の色は薄いが、涙で黒ずんで袖の色は濃くなる」と言う嘆き節。

とて(と詠んでから)、念誦(ねんず、読経)したまへるさま(為さる姿は)、いとどなまめかしさまさりて(いっそう艶めかしさが増して)、経忍びやかに誦みたまひつつ(経文を低く御唱えになって)、「法界三昧普賢大士(ほふかいざんまいふげんだいし)」とうちのたまへる(と普賢菩薩に鎮魂を願い奉りなさるのは)、行ひ馴れたる法師よりは異なり(けなり、尊く見えました)。

若君を見たてまつりたまふにも(若君の御尊顔を御覧に成ると)、「*何に忍ぶの(何とも恋しく夫人の面影が偲ばれて)」と、いとど露けけれど(源氏は思わず涙を誘われたが)、「かかる形見さへなからましかば(この形見すら無かったなら、其れこそ“何に偲ぶの種”)」と、思し慰む(思い慰み為されました)。　*注釈に≪『源氏釈』は「結び置きし形見の子だになかりせば何に忍ぶの草を摘まましし」（後撰集、雑二、一一八七、兼輔朝臣の母が乳母）を指摘する。≫とある。となると此処の文章は、まるでこの引歌の解説文だ。というより当時の人にとっては、ただの言葉遊びなのだろうが「何に忍ぶの」の多面性は、こうして指摘されないと今では俄かには気付きにくい。引歌にある「何に忍ぶの草を摘まましし」は＜何を楽しみにしてシノブ草を摘みましょうか＞という言い方で＜何を偲ぶ種(しのぶぐさ、思い出のよすが)して貴方を懐かしめるでしょうか＞という追想を歌っている、と思うし其れは間違いでは無いだろう。そして此処で言う「偲ぶ種」は「結び置きし形見の子」なワケだ。然し其れだけなら然程は面白い歌でもない。アリキタリの洒落言葉といった印象だ。ところが「何に忍ぶの」に＜何て恋しい＞という響きが在った事に気付かされると、俄然引歌が妖しく光る。穿てばシノブ草はシダ類でクサビ形というかヤジリ型というか亀頭に通じるような気もする。そういう形の草を弄って楽しんでいるようだ。そう思って冒頭句を見直せば「結び置きし」であり、その結果が「形見の子」だったのだから、引歌は縁を「結び置」く為に貴方の情熱を受け止めた、艶な思い出に浸っている歌だった。だから味わい深く、乳母らしい趣。幾分強引でも、少なくとも引歌に其の含みは認められるだろうし、この解釈は我ながら‘お得感’が有る。

宮はしづみ入りて(母君は悲しみに沈んで)、そのままに起き上がりたまはず、危ふげに見えたまふを(お命も危うげなので)、また思し騒ぎて(左大臣はまた慌てて)、御祈りなどせさせたまふ。

はかなう過ぎゆけば(母上は張り合いを失ったまま日が過ぎて)、御わざの(四十九日の)いそぎ(準備)などせさせたまふも(などを家人に申し付けなさるのも)、思しかけざりしことなれば(考え付かずにいた事なので)、尽きせずいみじうなむ(捗らず大変でした)。

なのめに(普通に)かたほなるをだに(欠点の有る子供でさえ)、人の親はいかが思ふめる(残された親はどれほど悲しむことか)、ましてことわりなり(まして美しい姫であれば深い悲しみは無理も無い)。また、類ひおはせぬをだに(他に姫がいらっしゃらなかった事までが)、さうざうしく思しつるに(更に寂しさを募らせて)、*袖の上の玉の砕けたり(秘蔵の宝が自滅した)けむよりも(とかいう事よりも)、あさましげなり(気が荒みそうでした)。　*「袖の上の玉の砕けたり」については「出典があるらしいが、未詳」との「注」となっている。何ともの消化不良だが、字面で整理すれば「仕舞って置く事さえ不安で手元から離さずに大事にしていた玉宝が不意の弾みで砕け散った」という皮肉っぽい悲話、か。

大将の君は、二条院にだに、*あからさまにも渡りたまはず(形ばかりにさえ、ただの一度もお出向きなさらず)、あはれに心深う思ひ嘆きて、行ひを(追善供養を)まめにしたまひつつ(几帳面にお勤め為されて)、明かし暮らしたまふ(日々お暮らしなさいます)。所々には(通い先の女たちには)、御文ばかりぞたてまつりたまふ(手紙だけをお送りになります)。　*「あからさま」は現代語の＜明らかな様＞ではなく、「あかる(離る＝その場を去る)」「さま(ようなこと)」の意と古語辞典に説明され、「あからさまにも」で＜ただの一度もその場を離れること無く＝その素振りも無く～しない＞となるようで、決して＜隠れて～した＞わけではなさそうだ。

かの御息所は、*斎宮は左衛門の司に入りたまひにければ(娘の斎宮が潔斎の為に御所の左衛門府の一角に籠もりなさっているとの事で)、いとど厳しき(いつくしき、その障りに成らない様にと厳格な)御清まはり(おんきよまはり、お清め)にことつけて(をしなければならないと理由付けて)、聞こえも通ひたまはず(お手紙も通わしなさいません)。　*注に「宮中の初齋院が左衛門府に設けられた」事とある。

憂しと(煩わしいと)思ひ染みにし世も(心底思った男女の仲も)、なべて厭はしうなりたまひて(ますます縁遠くお成りに為って)、「かかる絆し(ほだし、キズナ＝若君)だに添はざらましかば(こそ側で育てなくていいなら)、*願はしきさまにも(出家僧にさえ)なりなまし(なってしまうものを)」と思すには(と考え出してみなさると)、　*注に≪出家生活をさす。『完訳』は「ここに端を発する源氏の道心は、生涯、意識の底にあり続ける」と注す。≫とある。

まづ対の姫君の(先ずは二条院西の対に住まわせている若草の姫君が)、さうざうしくて(一人で不安そうに)ものしたまふらむありさまぞ(して居なさる姿を)、ふと思しやらるる(ふと思い遣られなさいます)。

夜は、御帳の内に(御帳台で)一人臥したまふに、宿直の人々(女房たち)は近うめぐりてさぶらへど(は帳台近くを囲んで侍っていたが)、かたはら寂しくて(添い寝が居ない寂しさに)、「*時しもあれ(秋の別れは辛い)」と寝覚めがちなるに、声すぐれたる限り(かぎり、僧ばかりを)選りさぶらはせたまふ(選んで唱えさせなさる)念仏の、暁方など(念仏が響く明け方は)、忍びがたし(人恋しさが身に染みます)。　*「時しもあれ」について注は≪『源氏釈』は「時しもあれ 秋やは人の別るべき あるを見るだに 恋しきものを」（古今集、哀傷、八三九、壬生忠岑）を指摘≫とある。引歌の「時しもあれ」は慣用句にも似た特徴的な語法らしく、古語辞典でも「時しもあれ」のままで＜選りによってこんな時に＞の意と解説されている。「時しも」の「しも」は強調で＜今この時＞くらいの感じ。「あれ」は「あれど」の短形で＜であるよりも＞の意図で述語を否定する。合わせれば＜今この時であるよりも＞なので＜何もこの時でなくても＞や＜どうせなら別の時に＞とも言い換えられる。とも「あれ」、「時しも」は「折しも」ほどではないが「必ずしも」今日では使われないとも言い切れなくも「無きにしも」非ずである。なお、歌の全体の解説はミロール倶楽部 Web サイトの「古今和歌集の部屋」ページに詳しいのでそちらに依拠して、筋をざっと浚えば「どうであれ秋には人と死別するべきではない、生きている人と会うのさえ切ないのだから」ということらしい。

「深き秋のあはれまさりゆく風の音、身にしみけるかな」と、慣らはぬ御独寝に明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に(菊の咲きかけた枝に)、濃き青鈍(あ

をにび、青ねずみ色)の紙なる文つけて(ふみつけて、手紙を結びつけて)、さし置きて往にけり(使者が差し出し置いて去っていきました)。

「今めかしうも(洒落た事を)」とて、見たまへば、御息所の御手なり。「聞こえぬほどは(お手紙を差し上げられなかった事情を)、思し知るらむや(お察し下さい)。

人の世をあはれと聞くも露けきに、後るる袖を思ひこそやれ　(和歌 9-12)

先立たれた身の寂しさを、知らぬものでも有りません　(意訳 9-12)

*筋は「奥様の御不幸はご愁傷様でした、さぞ御力落としの事と存じます」という挨拶文そのままで、掛詞も「聞くも露けき(聞けば涙する)」と「菊も露けき(菊が朝露に濡れる此の頃)」で控えめに抑えている。怨霊さえ自制出来たら奥床しい女だったろうに、と思わせる歌の設定。

ただ今の空に(ふと今朝の空を見て)思ひたまへあまりてなむ(書かずには居られなかったものですから)」とあり。

「常よりも優(いう、しとやかに)にも書いたまへるかな」と、さすがに置きがたう見たまふものから(さすがの達筆ぶりをやはり下へは置けないものと感心しながらも)、「つれなの御弔ひや(在り来りのご挨拶だな)」と心憂し(と怨念が気に掛かって嫌気が差します)。

さりとて、かき絶え(はっきり断って＝おぼろげな経緯を問い突き詰めて)音なう聞こえざらむも(絶縁してしまうのも)いとほしく(気後れして)、人の御名の朽ちぬべきことを(化け物まがいの言い立てで宮家の名誉を傷つけてはと)思し乱る(お悩みになります)。

「過ぎにし人は(死んだ人は)、とてもかくても(結局は)、さるべきにこそはものしたまひけめ(そういう運命だったのだろうに)、何にさることを(何故あんな御息所のおぞましい姿を)、さださだと(定かに)けざやかに見聞きけむ(はっきりと見聞きしたのだろう)」と悔しきは(という残念な思いは)、わが御心ながら、なほ(我ながらやはり)え思し直すまじきなめりかし(とても思い直せないもののようでした)。

「斎宮の御きよまはりもわづらはしくや(斎宮のお清めにも障るのではないか)」など、久しう思ひわづらひたまへど(源氏は長い間考えあぐねて居らしたが)、「わざとある(わざわざ寄越されたお手紙に)御返りなくは(お返事も差し上げないのでは)、情けなくや(余りに情緒に掛けて自分まで身窄らしい)」とて、紫の鈍める(にばめる、灰紫色の)紙に、

「こよなうほど(大分永い)経(へ、時が)侍りに去るを(はべりにけるを、経ってしまいましたが)、思ひたまへおこたらずながら(思い続けていながら)、つつましきほどは(喪中の間は)、さらば(御無沙汰申しましたが)、思し知るらむやとてなむ(お察し下さい)。

とまる身も消えしもおなじ露の世に、心置くらむほどぞはかなき　(和歌 9-13)

生きるも死ぬも夢のよう、思い詰めても詰まらない　(意訳 9-13)

*注に≪「止まる」「消え」「置く」は「露」の縁語≫とあって、語訳に「生き残った者も死んだ者も同じ露のようにはかない世に、心の執着を残して置くことはつまらないことです」とある。

かつは思し消ちてよかし(一つにはお忘れになるのが宜しいでしょう)。御覧ぜずもやとて(何も知らないと知らん顔なさって)、誰れにも(誰にも何も言わずに)」と聞こえたまへり(と御息所へお返事を差し出されました)。

里におはするほどなりければ(御息所は六条の方に居らした時だったので)、忍びて見たまひて(源氏の返事を忍んで御覧になって)、ほのめかしたまへるけしきを(夫人の枕元に出た怨霊への六条の化身を仄めかしなさっている文面を)、心の鬼に(自身の邪心の現れと)しるく見たまひて(はっきり悟り為さって)、「さればよ(やはり夢ではなかったか)」と思すも(と御思いに為れば)、いといみじ(実におぞましい)。

「なほ(詰まりは)、いと限りなき身の(宮家の体面に拘った)憂さなりけり(わだかまりだった)。かやうなる聞こえありて(こんな祟り話をお聞きに為ったら)、院にもいかに思さむ(院に於かれては何と御思いに為るだろう)。

(院は)故前坊の(こぜんぼうの、前坊であった亡き良人を)、同じき御はらからと言ふなかにも(御同腹兄弟の中でも)、いみじう思ひ交はしきこえさせたまひて(特に仲良く交わり申しさせ為されて)、この斎宮の御ことをも(この度に斎宮となった娘の行く末も)、ねむごろに聞こえつけ(良人が院にくれぐれも宜しなにと頼み込むのを)させたまひしかば(院は良人にお許しにさせ為されていたので)、

『その御代はりにも(死んだ良人の親代わりとなって)、やがて見たてまつり扱はむ(この上は姫宮を御育て致そう)』など、常にのたまはせて(ずっと仰って下さり)、『やがて(其の為に私に)内裏住み(うちずみ、後宮暮らしを)したまへ(しなされ)』と、たびたび聞こえさせたまひしをだに(何度も御申し下されていたものを)、

いとあるまじきこと(とても畏れ多い事)、と思ひ離れにしを(と思い離れて六条住いをしていたのに)、かく心よりほかに(このように意外にも)若々しきもの思ひをして(ずっと若い源氏と恋仲になって)、つひに憂き名をさへ(終には悪い評判まで)流し果てつべきこと(流してしまうように成ろうとは)」と、思し乱るるに(思いを千々に乱されるお姿は)、なほ例のさまにもおはせず(やはり以前の御様子ではありませんでした)。

さるは(其れは然うと)、おほかたの世につけて(一通りの世の習わしについては)、心にくくよしある聞こえありて(造詣の深い方として御息所は良く知られていて)、昔より名高くものしたまへば、野の宮の御移ろひの程にも(ほどにも、頃でも)、をかしう*今めきたること(嵯峨野で流行の遊戯会や歌会などを)多くしなして(多く催して)、　*当時の流行り遊びについて此処には具体例が無いが、「風俗博物館」の Web サイトに「双六(すごろく)・貝合せ・囲碁・偏つぎ」などが紹介されている。

「殿上人どもの好ましき(このましき、風流めかした好き者)などは、朝夕の露分けありくを(朝に夕に城外の嵯峨野の里に通うのを)、そのころの役になむする(まるで各々の仕事のようにして

いる)」など聞きたまひても(などと御聞きに為っても)、大将の君は、「ことわりぞかし(そりゃあ然うだろう)。ゆゑは飽くまでつきたまへるものを(御息所の教養の深さは大したものだ)。もし、世の中に飽き果てて(憂き世に嫌気が差して)下りたまひなば(伊勢へお下りになったら)、さうざうしくもあるべきかな(寂しくなるだろうなあ)」と、さすがに思されけり(其の事については御思いでした)。

[第八段　三位中将と故人を追慕する]

御法事など過ぎぬれど(七日ごとの追善法要などを済まされたが)、正日(しゃうにち、四十九日の正忌日)までは、なほ籠もりおはす(源氏は左大臣家に籠もって尚も謹慎なさいます)。

ならはぬ御つれづれを(習い事も無い源氏の退屈さを)、心苦しがりたまひて(御心配なさって)、三位中将は(さんみのちゅうじゃう、三位に昇進なさった義兄の中将は)常に参りたまひつつ(常に源氏の御座に訪ねて参られて)、世の中の御物語など、まめやかなるも(真面目な事も)、また例の(また何時もの)*乱りがはしきことをも(淫らな女遊びの事をも)聞こえ出でつつ(話題に出しながら)、　*「乱りがはしきこと」の画面は〈秩序無く騒々しい様〉で、意味は〈自堕落に乱れ勝ちな事〉なのだろう。其の主な因子が〈淫らな事〉なのは語感が物語る。ところでおよそ男女の仲に関らず、誠実に応対しようとする相手が他に気移りしていれば、其の不実を妬んで詰め寄るのは共有目的意識の破綻認識であって、当然に認められるべき社会的正当性を有し、古今東西を問わず「誠実な姿勢」は協同事業の遂行契約に於いて関係各位の権利義務として規定される基本条件である。一夫多妻制と言っても其の実体は大して立派な制度でもなく、理念としては飽く迄もこの基本条件を前提としつつ、実際には実体社会に於ける構造上厳然たる存在の実力者の、主に男の側の〈すさび心〉の社会的許容度を言っていたに過ぎない。尤も〈過ぎない〉といっても、物質の質量と絶対量によって生活が左右されるという、生物生態上および人類文化上の特性は決して軽視されるべきではないだろうが。ともあれ〈過ぎない〉ので、本質的には「乱りがはしきこと」は場当たりの女遊びだけに限るものでもない。従って正妻から見れば、或る程度囲い者として其れなりの体裁を整えていたとしても、他の〈妻〉という立場に在る者たちも責める対象である。と同時にまた一方で、御息所のような身分の高い女を疎略に扱えないという事も社会制約からして当然であり、現に源氏は院から正妻や六条を大事にするように諌められていた記述もあった。それでもやはり「乱りがはしきこと」と敢えて言えば、専ら遊び相手としての〈女通い〉を指しているとは思う。

慰めきこえたまふに(慰め申しなさる中でも)、かの内侍ぞ(例の典侍の話こそは)、うち笑ひたまふくさはひにはなるめる(お笑い種になるようです)。大将の君は、

「あな(うあ)、いとほしや(ひどすぎる)。*祖母殿の上(おばおとどのうへ)、な、いたう軽めたまひそ(あまり揶揄なさいますな)」といさめたまふものから(と嗜めながら)、常にをかしと思したり(いつも笑って居らした)。　*「祖母殿の上」は典侍。実際、当年で60歳過ぎの「おばば様」。

かの十六夜の(三年前の初春十六夜に後を追けられて隠しようも無い常陸宮の姫君との後日談を中将に尋ねられては)、さやかならざりし秋のことなど(茶化すしかない秋の出会いの失敗談など)、さらぬも(その他にも)、さまざまの好き事どもを、かたみに(互いに)*隈なく(曝け出して)言ひあらはしたまふ(打ち明けなさって)、果て果ては(終いには)、あはれなる世を言ひ言ひて(儘為らぬ世を言い合って)、うち泣きなどもしたまひけり(嘆き合ったり為さいました)。　*「隈無く

(くまなく)」は客観的な意味では＜隠す事無く＞だろうが、「好き事」のような私事を仮に本人が＜包み隠さず＞打ち明けても、婚儀の日取りのような他者へのお披露目でもなければ其れが検証可能な＜本当の事＞には成り得ない。それに中将は明け透けな性格付けになっているが、源氏は内向的だし絶対の秘密も抱えていたので、本人の意識としても＜包み隠さず＞打ち明けたとは思えない。確かに中将も大宮の腹からなので一応は宮筋と言えなくも無いだろうが、其れでも常陸宮の姫の話を在りのままロにするのは、いろんな意味で憚られるだろう。言うまでもないのだろうが、結局は馬鹿話は馬鹿話で当たり障りの無い話に落ち着くしかない。その上で何処まで上手く「隈無く＝明るく」話を作れるか、は今でも大事だ。

*時雨うちして(時雨が降って)、ものあはれなる暮つ方(しっとりした夕方)、中将の君、鈍色の直衣(にびいろのなほし)、指貫(さしぬき、袴)、うすらかに衣更へして(薄い色に衣替えして)、いと雄々しうあざやかに(とても凛々しくすっきりとして)、心恥づかしきさまして(いやに改まった様子で)参りたまへり(遣っていらっしゃいました)。　*「時雨(しぐれ)」は≪秋から冬にかけて、降ったりやんだりする小雨。(古語辞典)≫とある。冬の季語で、「時雨月(しぐれづき)」は陰暦十月(神無月かんなづき)の異名、ともある。初冬十月になった。　*「衣更へ」は≪十月一日の冬の衣裳への衣更。≫と注釈にある。

君は、*西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。*風荒らかに(あららかに、荒々しく)吹き、時雨さとしたるほど(時雨がさっと降ってくると)、涙もあらそふ心地して(涙が其れと競うように流れて)、　*部屋の西の端が庭先だとすると、左大臣家でも源氏の住いは東の対だったのだろうか。二条院では東の対と明示されていたが、左大臣邸では明示されて居なかった気がする。　*「突風」は時雨に付き物という。寒気が暖気の下に潜り込む寒冷前線の南下による初冬の気候現象との事。

「*雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」と、うちひとりごちて(独り言のように呟いて)、頬杖つきたまへる御さま(頬杖を付いていなさる源氏の姿を中将は)、　*注釈に≪『劉夢得外集』第一「有所嗟」の詩句「相逢相失両如夢　為雨為雲今不知」を口ずさむ。≫とある。『劉夢得』は『劉禹錫(りゅう うしゃく)』で、≪(772-842) 中国、唐代の詩人。字(あざな)は夢得(ぼうとく)。白居易から詩豪と称賛された。湖南省朗州の民謡を改作した「竹枝詞」十余編で知られる。著「劉夢得文集」≫(大辞泉)との事。「有所嗟」は(うしょさ)で＜ふと思う事＞くらいだろうか。詩の字面は「逢うも別れも夢のよう、何処に浮かぶか流れるか」と読める。是を歌う源氏の心理描写は、＜悲しみを乗り越えていこうとする、喪明けに備えた心の整理＞、とでも受け取って置くか。時雨模様を背景に夢を持ち出されては、何とも解り難い。

「女にては(死んだ妹も女心にこの源氏の美しさには)、見捨てて亡くならむ魂(先立った未練を悔やんで)かならずとまりなむかし(必ず心寄せる事だろう)」と、色めかしき心地に(色っぽい気分で)、うちまもられつつ(見つめながら)、近うついゐたまへれば(近くに御掛けに為ったので)、しどけなくうち乱れたまへるさまながら(源氏は寛いだ緩めの着こなしのままながら佇ま居を正して)、紐ばかりをさし直したまふ(解けた上着の紐だけは結び直しなさいます)。

これは(源氏のほうは)、今すこしこまやかなる(中将より少し濃い色の)夏の御直衣に、紅のつややかなる(紅色の光沢のある袿を)ひき重ねて(下襲して)、やつれたまへるしも(地味なお姿でいらっしゃるのが、却って)、見ても飽かぬ心地ぞする(見飽きない気が致します)。

中将も、いとあはれなるまみに(中将もとても悲しそうな眼差しで)眺めたまへり(前栽辺りを眺めなさいます)。

「雨となりしぐるる空の浮雲を、いづれの方とわきて眺めむ　(和歌 9-14)

「すさぶ浮世の村時雨、誰が流すか涙雨　(意訳 9-14)

*中将は表向き「雨雲はどっちから湧いて来ますかね」と独り言のように言って空を眺めるのだろうが、わざわざ源氏の側へ来て言っているのだから「どうやら雨模様ですが、貴方の姿に未練を寄せる涙雨は誰のものだと思いますか」と源氏に聞いている、という良く在る設定。中将の妹思いは余り記述がなかったが、「雨夜の品定め」で少し源氏を皮肉ってはいたか。時雨模様を背景に、亡き人を「夢見る」のは源氏だけではなかったようだ。

行方なしや(分かりませんよね)」と、独り言のやうなるを、

「見し人の雨となりにし雲居さへ、いとど時雨にかき暮らすころ」(和歌 9-15)

「時雨と想いを競り合って、今でも涙に掻き暮れる」(意訳 9-15)

*中将が表向きは雲行きを聞いてきたので、光君も「雨雲が居ますから、ざっと一雨来そうですね」と表向きは答えた。ま、此処で実際に「雨となりにし(雨を降らせるような)」「雲居さへ(雲行きなので)」と「見し人(判断した人)」は源氏と中将。だが、中将が雲行きに掛けて聞いた＜この雨は誰の涙雨だろう＞という問い掛けに対する答えとしては、「雨となりにし(流れていってしまった＝亡くなった)」「見し人の(情交して契りを結んだ人の＝妹姫の)」「雲居さへ(面影が浮かんで)」という言い方で＜正妻だった姫の涙雨＞だ、と源氏は故姫を懐かしんで答えている。そして更に「いとど時雨にかき暮らすころ(ますます泣けてきて今でも忘れる事が出来ません)」と言うのだが、敢えて「かき暮らすころ(今でもまだ)」と念押しする所に、却って忌明けを意識した距離感が滲む。穿てば衣替えのこの時期に、中将は其処まで含めて源氏の様子を確認しようとした気もする。

とのたまふ御けしきも(という源氏の御応えの為さり方も)、浅からぬほどしるく見ゆれば(妹姫への浅からぬ情愛がはっきりと感じられたので中将は)、

「あやしう(どうも思わしくなく)、年ごろは(ずっと)いとしもあらぬ(余り其れほど愛しくも思わぬ)御心ざしを(お気持ちを)、院など、居立ちて(院の殊更の)のたまはせ(肝いりと)、大臣の御もてなしも心苦しう(父上の気遣いの忝さと)、大宮の御方ざまに(母上の御血筋とに)、もて離るまじきなど(とても断り切れないと源氏は観念して故妹姫と結ばれた上は)、かたがたにさしあひたれば(色々差し障りがあって打ち解けきれないとはいえ)、えしもふり捨てたまはで(とても然うは顕ら様に拒み為されずに)、

もの憂げなる御けしきながら(余所余所しい気まずさの間々に)、ありへたまふなめりかしと(お過ごしに為って来られたかと)、いとほしう見ゆる折々ありつるを(労しく見えた事が何度も在ったものだが)、まことに(形ばかりでなく本心から)、やむごとなく重きかたは(源氏が姫を正妻として大事に思って居らしたという事を)、ことに思ひきこえ(改めて思い知らしめ)たまひけるなめり(頂いた次第のようだ)」

と見知るに(と気が付いたので)、いよいよ口惜しうおぼゆ(いっそう妹姫の先立ちを残念に御思いに為りました)。よろづにつけて(全てに通じる大元の)光失せぬる心地して(光を失った気持ちに為って)、屈じ(くじ、喪失感は)甚経り去り(いたかりけり、大きかったのです)。

枯れたる下草のなかに(源氏は枯れ前栽の下草から)、龍胆(りんだう)、撫子などの、咲き出でたるを折らせたまひて(咲き出していたのを折り取らせなさって)、中将の立ちたまひぬる後に(中将が立ち去られた後に)、若君の御乳母の(若君の乳母として母宮に仕えている女房の)宰相の君(さいしゃうのきみ)して(を御呼び召して)、

「草枯れのまがきに残る撫子を、別れし秋のかたみとぞ見る　(和歌 9-16)

「咲き残ったこの撫子の、佇むだけの潔さ　(意訳 9-16)

*「撫子」を「若君」に置き換えれば、この情景が其のまま源氏の心象風景だという事以外に混み入った趣は無い。其の率直さの所為か古さを感じない。言い換えが却って古めかしい奇妙な面白さ。

*にほひ劣りてや御覧ぜらるらむ(若は故姫より芳しさが劣ると御思いに為るのでしょうか)」と聞こえたまへり(と伝言で母宮に申し上げなさいました)。　*歌に添えた言葉なのだから、歌を受ければ＜枯れてしまった草より咲き残った撫子の方が芳しさが劣ると御思いに為るかもしれません＞だが、＜草＞は「故姫」で＜撫子＞は「若君」だから＜若は姫ほど艶やかでは無いでしょうが＞くらいの蛇足、だろうか。

げに何心なき御笑み顔ぞ(確かに無邪気な若君の御笑顔は)、いみじううつくしき(大変可愛らしい)。宮は、吹く風につけてだに(母宮は風が吹くだけでも)、木の葉よりけにもろき御涙は(木の葉が震えるより先に泣き出すほどの涙もろさで)、まして(木の葉よりも重いお手紙なら尚更の事)、とりあへたまはず(とても手にとって御覧になる事が出来ません)。

「今も見てなかなか袖を朽たすかな、垣ほ荒れにし大和撫子」(和歌 9-17)

「けなげに咲いていじらしい、袖に時雨れる大和撫子」(意訳 9-17)

*この歌は良く分からない。歌意は「今も見ていて可哀想で泣けてしまう、守ってくれる母親を亡くした若君だから」なのだろう。其の筋では「袖を朽たす(そでをくたす)」は＜涙に暮れる＞と読む。しかし、詠まれた情景では「袖を朽たす(端を腐らせる)」は、「荒れにし(荒れてしまった)」「垣穂＝垣根」に丸々掛かる。ということは、袖垣を腐らせて荒れた間々にしている、という自堕落な情景を思い起こさせてしまう。其れも旅先では無い、自邸である。之は大臣家らしからぬ、まして大宮らしからぬ端っ葉さではないのか。「垣ほ荒れにし(護りが傷んだ)」は若君の不幸な境遇を訴えているとは思うが、源氏が詠んだ「草枯れ」の季節感とは違って、人工物に対する手入れの悪さが客観的に描写されてしまう。其の上「朽たす」に「荒れにし」を重ねる＜侘しさ＞に雅は無く、やはり別の言葉を選ぶべきと思えてならない。作者に大宮の性格付けで、何か思惑があるのだろうか。尤も、この歌に＜宮のだらしなさ＞ないし＜管理能力不足＞を込める意図は作者には無く、むしろ「朽たす」や「荒れにし」に対する＜宮の無力さ＞を表している、のかもしれない。それでも客観的な歌の印象は変わらず、乗り切れないままざっくり言い換えた。

なほ、いみじうつれづれなれば(さっぱり気が晴れないので)、朝顔の宮に、「今日のあはれは(今日の寂しさは)、さりとも(いくら何でも)見知りたまふらむ(お分かり頂けるだろう)」と推し量らるる(と想像できる)御心ばへなれば(姫の人柄へのご期待があって)、暗きほどなれど(夜になってからだったが)、聞こえたまふ(お手紙なさいます)。

絶え間遠けれど(ごく絶間に)、さのものとなりにたる(忘れた頃に遣ってくる)御文なれば(源氏からの手紙なので)、咎なくて(側仕えの女房も不審も抱かずに)御覧ぜさす(朝顔の姫宮に御覧に入れます)。空の色したる(時雨空と同じ灰色の)*唐の紙に(からのかみに)、　*「唐紙(たうし)」は≪中国から輸入した紙。コウゾの皮に若竹の繊維を混ぜて、梳いたもの。厚く重く、質は脆く裂け易い。墨汁の吸収がよく、書画用、または表装の裏付けにした。(小学館古語辞典)≫とある。

「わきてこの暮こそ袖は露けけれ、もの思ふ秋はあまた経ぬれど　(和歌 9-18)

「何だか今日は泣けてくる、寂しさすらも儚くて　(意訳 9-18)

*しっとりとした初冬の歌ではあるのだろう。ただ、内容は普通の文面と変わりない。言い方も「とりわけ今日の夕暮れは涙に湿りがちです、寂しい思いは他にも随分して来ましたが」と、捻りも無い。敢えて言えば、其の然り気無さの中に「妻に死に別れて以来この忌明け前に改めて悲しみが募ります、もの思う秋もいつしか過ぎ去りましたが」という複意が織り込んである。しかし、その複意は言わずもがなで、この時期に出した手紙に「分きて此の(今日は特に)」と在れば其れだけで其の意は汲める。そういう相手に出している訳で、どうも物足りない。

いつも時雨は」とあり。御手などの心とどめて書きたまへる(源氏は字を随分丁寧にお書きになっていて)、常よりも見どころありて(いつもより心が込もっている手紙に見えて)、「過ぐしがたきほどなり(お返事を差し上げませんと)」と人も聞こえ(と女房も申し)、みづからも思されければ(姫宮はご自身でもそう御思いになって)、

「大内山を(大内山にお籠もりになられた宇多天皇の出家後の御謹慎のように服喪されている光君を)、思ひやりきこえながら(心配致し申し上げながら)、えやは(御見舞い申すのはとても僭越と、御遠慮申し上げて来ました)」とて(と前置きして)、

「秋霧に立ちおくれぬと聞きしより、しぐるる空もいかがとぞ思ふ」(和歌 9-19)

「さぞや御力落としかと、模様眺めの時雨空」(意訳 9-19)

*取り合えず複意が目に付いた「霧に立ち後れぬ(霧が立ち込めた日に先立たれた)」と「しぐるる空(時雨時分の嘆きの程)」を重ね読みして通すと、「秋の霧立つ日に御方様に先立たれ為されたと御聞き致しましたが、初冬の時雨空となった此の頃の御嘆きの程は如何でしょうか」という文面になる。それなりに季節柄の情緒は在るが、それこそ季節柄の挨拶文の趣ではある。ならば、さぞかし「秋霧」に際立った風情があるのだろうと思ったが、「春霞」に対する秋曇りの情景の他に特別な意味は、調べた限り見つからない。「立ちおくれぬ」の「立ち」の枕に「霧」を出しただけだろうか。となると、歌の趣は平坦だ。この一連の和歌の然り気なさは素直に受け止めるべきなのか、精彩の無さを疑うべきなのか。いや、精彩が無いなどと言えるほど歌に詳しくも無いのだから、素直に受け止めるしかないのだが、何か重要な文脈を見落としているような気もして、妙に落ち着かない。

とのみ、ほのかなる墨つきにて(擦れ気味の筆遣いで)、思ひなし心にくし(姫の其の弁えた姿勢が心憎い)。何ごとにつけても、見まさりはかたき世なめるを(良く知れば相手の欠点が見えて知れば知るほど素晴らしいという事は難しいものだが)、つらき人しもこそと(知らせようとしない引き気味の人のほうに)、あはれにおぼえたまふ(興味を御覚えになる)人の御心ざまなる(源氏の御性格なのでした)。

「つれなながら(引き気味といっても)、さるべき折々の(折に触れた時々には)あはれを過ぐしたまはぬ(気遣い在る挨拶を欠かさずお交わしになる)、これこそ、かたみに情けも見果つべきわざなれ(互いに生涯思い遣りを掛け合える仲だろう)。

なほ、ゆゑづき(教養があって)よしづきて(風流が分かって)、人目に見ゆばかりなるは(人目に立つほどの才人は)、あまりの難も出で来けり(出過ぎばり勝ちになるものだ)。対の姫君を(西の対に居る紫の君は)、さは生ほし立てじ(そのようには育てまい)」

と思す(と御思いになります)。「つれづれにて(つまらなさそうに)恋しと思ふらむかし(寂しがっているのだろう)」と、忘るる折なけれど(源氏は対の姫君の事を忘れた事は無かったが)、

ただ女親(めおや)なき子を(それはちょうど女親を亡くした子に)、置きたらむ心地して(留守番をさせているような気分で)、見ぬほど(世話をしないでいるのが)、うしろめたく(気が引けたが)、「いかが思ふらむ(浮気を恨まれる)」とおぼえぬぞ(という負い目が無いのが)、心やすきわざなりける(気が楽な点でした)。

暮れ果てぬれば(夜が更ければ)、大殿油(殿中燈火を)近く参らせたまひて(近くに持って来させなさって)、さるべき限りの人びと(気に入った女房たちだけを周りに侍らせて)、御前にて(御側近くで)物語などせさせたまふ(世話話などをさせなさいます)。

*中納言の君といふは、年ごろ忍び思ししかど(数年来お手つきのお遊び相手だったが)、この御思ひのほどは(この喪中の間は)、なかなかさやうなる筋にもかけたまはず(さすがにそうしたお相手には為されませんでした)。　*以前、「末摘花」巻に琵琶の名手で「中務の君」という御手付き女房の件が少し語られていた。中将に見初められていたが袖にして光君の色になった。それで大宮からも疎んじられていた、という因果な女房だった。ま、別人か。

「あはれなる御心かな(故姫を御思い遣られて御出でになる)」と見たてまつる(と中納言の君は源氏の節度有る振舞いを敬い申し上げる)。おほかたにはなつかしううち語らひたまひて(従って色事抜きだが源氏はこの女房にも親しくお話し合いなさって)、

「かう、この日ごろ、ありしよりけに(以前より余計に)、誰も誰も紛るるかたなく(誰も入れ替わる事無く)、見なれ見なれて(みな親しく見知ったので)、えしも常にかからずは(いつまでもこうしては居られないのは)、恋しからじや(寂しい事になる気がする)。いみじきことをばさるものにて(姫との死別はひとまず別にしても)、ただうち思ひめぐらすこそ(少し考えてみるだけでも)、耐へがたきこと多かりけれ(世の中には悲しいことが多いものだ)」とのたまへば(と御話しになると)、いとどみな泣きて(思わず皆泣いて)、

「いふかひなき御ことは(御方様の御不幸は)、ただかきくらす心地しはべるは(ただ悲しみに暮れる他無いのは)、さるものにて(仕方ないとして)、名残なきさまに(四十九日の忌日明けに部屋を片付けて)あくがれ果てさせたまはむほど(殿がお邸を御離れ遊ばすと)、思ひたまふるこそ(思い致しますと)」と、聞こえもやらず(中納言の君は最後まで言い切れません)。あはれと見わたしたまひて(源氏は宥めるように座を見渡しなさって)、

「名残なくは(片付けるとは)、いかがは(何とも)。心浅くも取りなしたまふかな(そんな薄情者の様に言いなさるな)。心長き人だにあらば(気長に見ていて貰えたら)、見果てたまひなむものを(私が決して冷淡でないことを分かって呉れる筈だ)。命こそはかなけれ(寿命までは分からないが)」とて、燈をうち眺めたまへるまみの、うち濡れたまへるほどぞ、めでたき(美しい)。

とりわきてらうたくしたまひし(夫人が特に可愛がって居らした)小さき童の(童女で)、親どももなく(両親も無く)、いと心細げに思へる(とても心細げに見えた者を)、ことわりに見たまひて(不安になるのも当然と源氏は御思いになって)、

「貴君(あてき、童女の名前)は、今は我をこそは思ふべき人なめれ(今度は私を親と思えばいいんだよ)」とのたまへば、いみじう泣く(その子は大泣きする)。ほどなき(丈短かの)衵(あこめ、女児内着)、人よりは黒う染めて(を誰よりも濃く染めて)、黒き汗衫(かざみ、女児上着)、萱草(くわんざう、橙赤色)の袴など着たるも、をかしき姿なり(可愛い格好でした)。

「昔を忘れざらむ人は(故姫を思ってくれるなら)、つれづれを忍びても(遣る瀬無さを忍んででも)、幼なき人を見捨てず(若君を世話して)、ものしたまへ(御仕えして下さい)。見し世の名残なく(生前の暮らしぶりが次第に失われて)、人びとさへ離れなば(女房たちまで居なくなってしまうと)、たつきなさも(縁遠さが)まさりぬべくなむ(いっそう進んでしまいますから)」

など、みな心長かるべきことどもをのたまへど(名残を惜しんで御話しになりましたが)、「いでや(忌明けとなって殿が邸を出て御出でに為れば)、いとど待遠にぞなりたまはむ(いっそうお訪ねが待ち遠しくなるのだろう)」と思ふに(と女房たちは思って)、いとど心細し(ますます心細くなるのでした)。

大殿は(御父君は)、人びとに(女房たちに)、際々ほど置きつつ(其々の身分に応じて)、はかなきもてあそびものども(故姫の使った小物や)、また、まことにかの御形見なるべきものなど(正に御形見となる御召し物などを)、わざとならぬさまに取りなしつつ(事改まった儀式などはせずに)、皆配らせたまひけり(皆に御配らせなさいました)。

[第九段　源氏、左大臣邸を辞去する]

君は(四十九日の正忌日が明けると源氏は)、かくてのみも(こうして左大臣邸に籠もったままで)、いかでかはつくづくと(どうして何もしないで)過ぐしたまはむとて(過ごしていられようかと)、院へ参りたまふ(院へ御挨拶に伺うことになさいます)。

御車さし出でて(御車を玄関先に用意して)、御前(ごぜん、先導)など参り集るほど(などが集まって控える頃に)、折知り顔なる(別れを際立たせるように)時雨うちそそきて(時雨がぽつぽつ降ってきて)、木の葉さそふ風(木の葉を散らす風が)、あわたたしう吹き払ひたるに(急に吹き払ったので)、御前にさぶらふ人々(見送りの女房たちは)、ものいと心細くて(いよいよ寂しさを覚えて)、すこし隙ありつる(やっと乾きかけていた)袖ども潤ひわたりぬ(袖をびっしょり濡らしてしまっていました)。

夜さりは(夜には)、やがて(源氏はその後)二条院に泊りたまふべしとて(二条院にお泊まりに為るとの事で)、侍ひの人びとも(侍所の人々も)、かしこにて待ちきこえむとなるべし(そちらでお待ち申し上げるべく)、おのおの立ち出づるに(それぞれ左大臣家を引き払うので)、今日にしも(今日を以って)とぢむまじきことなれど(関係が絶たれるという訳ではないが)、またなくもの悲し(汐が引く物悲しさでした)。

大臣も宮も、今日のけしきに、また悲しさ改めて思さる。宮の御前に御消息聞こえたまへり(源氏は宮に宛て御挨拶の御手紙を御送り為されました)。

「院に(院に於かれましては)おぼつかながりのたまはするにより(様子をお知りになりたいとの仰せですので)、今日なむ参りはべる(本日は伺う事に致します)。あからさまに(こうしてほんの容ばかりに)立ち出ではべるにつけても(外出いたします事を思えば改めて)、今日までながらへはべりにけるよと(私の方は今日まで生き永らえているのだなあと)、乱り心地のみ(姫を失った悲しみばかりに)動きてなむ(気持ちが動いて)、聞こえさせむもなかなかにはべるべければ(お目にかかれば却って悲しみが増すばかりになりますので)、そなたにも参りはべらぬ(其方には御挨拶に伺いません)」

とあれば、いとどしく宮は(ますます宮は涙に暮れて)、目も見えたまはず、沈み入りて(項垂れて)、御返りも聞こえたまはず(御返事も差し上げ為されません)。

大臣ぞ(すると岳父の大臣の方が)、やがて渡りたまへる(ややあって源氏の殿舎に御越しになりました)。いと堪へがたげに思して(とても堪らなく無念そうで)、御袖も引き放ちたまはず(涙の袖を下ろしなさらない)。見たてまつる人々もいと悲し(周りに居た女房たちもとても悲しくなっていました)。

大将の君は、世を思しつづくること(服喪の間中に故姫の事、若君の事、御息所の怨念、対の姫君の事、大臣や大宮との事、その他の人間関係や世の無常などを考え続けて)、いとさまざまにて(思うところ大いにあって)、泣きたまふさま(泣きなさる姿にも)、あはれに心深きものから(味わいの深い趣を漂わせて居らしたが)、いとさまよくなまめきたまへり(それがまた一段と風格を備えた艶やかさで御座いました)。

大臣、久しうためらひたまひて(暫くして漸く涙を御抑えになって)、

「齢のつもりには(歳の所為か)、さしもあるまじきことにつけてだに(一寸した事にでも)、涙もろなるわざにはべるを(涙もろくなっておりますが)、まして、干る世なう(ひるよなう、涙も

乾く間もなく)思ひたまへ惑はれはべる心を(思い致し惑い申す心を)、え閑め侍らねば(えのどめはべらねば、とても鎮められずに居りますれば)、人目も(傍目にも)、いと乱りがはしう(ひどく乱れがましく)、心弱きさまにはべるべければ(頼りなく思われるでしょうから)、院などにも参りはべらぬなり(院へは御供出来ません)。

ことのついでには(事の序でにでも)、さやうにおもむけ奏せさせたまへ(そのように宜しくお伝え下さい)。いくばくもはべるまじき老いの末に(余命幾許も無いこの老い先に)、うち捨てられたるが(娘に先立たれるとは)、つらうもはべるかな(辛う御座います)」

と、せめて思ひ静めてのたまふけしき(勤めて冷静に御話しなさる様子が)、いとわりなし(とても労しい)。君も、たびたび鼻うちかみて(貰い泣きに何度も鼻をかんで)、

「後れ先立つほどの定めなさは(後先となる寿命の不確かさは)、世のさがと見たまへ知りながら(世の習いと知りながら)、さしあたりて(直面して)おぼえはべる心惑ひは(思い知る困惑は)、類ひあるまじきわざとなむ(喩え様も無い事だとは、)。院にも、ありさま奏しはべらむに(御説明申し上げますので)、推し量らせたまひてむ(お分かり頂けるでしょう)」

と聞こえたまふ(とお応えになると、大臣は)。「さらば(それでは)、時雨も隙なくはべるめるを(時雨も止む間も無さそうですから)、暮れぬほどに(日暮れる前に)」と、そそのかしきこえたまふ(源氏の出立を促し申し為さいました)。

うち見まはしたまふに(いよいよ見納めかと源氏が部屋を見渡しなさると)、御几帳の後(みきちゃうのうしろ)、障子のあなたなどのあき通りたるなどに(障子向こうの開け放たれた廂に)、女房三十人ばかり押し凝りて(おしこりて、押し固まって)、濃き、薄き鈍色どもを着つつ、皆いみじう心細げにて、うちしほれたれつつゐ集りたるを(項垂れて控え集う様を)、いとあはれ、と見たまふ(感慨深く御覧になります。すると大臣は、)。

「思し捨つまじき人もとまりたまへれば(大事な若君が残って御出でなので)、さりとも(今後も)、もののついでには立ち寄らせたまはじやなど(何かとお立ち寄り頂けるだろうと)、慰めはべるを(私は安心しては居りますが)、ひとへに思ひやりなき女房などは(思い込みの激しい女房などの中には)、今日を限りに、思し捨てつる故里と(君に捨てられた昔の家になってしまうと)思ひ屈じて(思い嘆く者も居て)、

長く別れぬる悲しびよりも(故姫と死に別れた悲しみよりも)、ただ(むしろ)時々馴れ仕うまつる(時々に親しく御仕え致しました)年月の名残なかるべきを(晴れがましい日々が終わってしまう事が)、嘆きはべるめるなむ(嘆かわしいと)、ことわりなる(言うのです)。

うちとけおはしますことははべらざりつれど(君が故姫と打ち解けなさる事は無かったのでしょうが)、さりともつひにはと(それでもいつかはと)、あいな頼めしはべりつるを(私は高望みして居りましたのですが)。げにこそ(全く)、心細き夕べにはべれ(心寂しいばかりの夕暮れです)」とても(とも仰っては)、泣きたまひぬ(お泣きに為りました)。

「いと浅はかなる人びとの嘆きにもはべるなるかな(随分情けない女房たちの嘆きではありませんか)。まことに(大臣の仰せの通り)、いかなりともと(私もいつかは妻に分かって貰えるものと)、のどかに思ひたまへつるほどは(呑気に考えていた内は)、おのづから御目離るる折もはべりつらむを(つい久しくお目に掛からない事も在りましたが)、なかなか今は、何を頼みにてかは(頼りになる妻を失ったので)おこたりはべらむ(甘えていられません)。今御覧じてむ(また直ぐ伺います)」

とて出でたまふを(と言って出発なさる源氏を)、大臣見送りきこえたまひて(大臣は見送り申しなさって)、入りたまへるに(若夫婦が暮らした部屋を見直されれば)、御しつらひよりはじめ(調度類や部屋割りなども)、ありしに変はることもなけれど(姫の生きていた頃と変わりは無かったが)、空蝉のむなしき心地ぞしたまふ(蝉の抜け殻のような空虚さを覚え為さる)。

御帳の前に(寝台の前に)、御硯などうち散らして(硯が出しっ放しになっていて)、手習ひ捨てたまへるを取りて(源氏が試し書きしたものを大臣は手に取って)、目をおししぼりつつ見たまふを(目を凝らしてご覧になるので)、若き人々は(若い女房たちは)、悲しきなかにも(悲しみの中にも)、ほほ笑むあるべし(微笑ましく思った)。

あはれなる(趣のある)古言ども(ふることども、昔の詩歌たちの)、唐のも大和のも(からのもやまとのも)書きけがしつつ(書き殴って在って)、草にも(そうにも、仮名とか)真名にも(まなにも、漢字とか)、さまざまめづらしきさまに書き混ぜたまへり。

「かしこの御手や(大したものだ)」と(と大臣は)、空を仰ぎて眺めたまふ。よそ人に(もはや他人として源氏を)見たてまつりなさむが(見るようになるのが)、惜しきなるべし(残念なのだろう)。「*旧き枕故き衾(ふすま、布団)、誰と共にか」とある所に(と書いて在る所に次の歌が添えられていました)、　*注に≪『長恨歌』の一句「鴛鴦瓦冷霜花重、旧枕故衾誰与共」の訓読。≫とある。この『長恨歌』の一句の部分は正しくは「鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰與共」と書くようで、「鴛鴦(エンオウの)瓦(カワラ)冷(ヒヤヤカにして)霜華(ソウカ)重(オモく)」「翡翠(ヒスイの)衾(フスマ)寒(サムくして)誰與(タレとクミし)共(アワん)」と訓読みして、＜オシドリ型のカワラは冷えて霜の華が重く積り＞＜カワセミ柄の布団は寒く共に寝る人も居ない＞と理解すれば良いらしい。「鴛鴦」はオシドリの雌雄で、「翡翠」はカワセミの雌雄との事。詰まり源氏は＜妻を亡くして独り寝が寂しい＞という事を教養人らしい嗜みで流し書きして在った、と言う意味の描写。

「なき魂ぞいとど悲しき寝し床の、あくがれがたき心ならひに」(和歌 9－20)

「いっそ悲しい独り寝に、未練ばかりを抱きしめる」(意訳 9－20)

また、「*霜の花白し」とある所に(と在る所には次の歌が添えて在りました)、　*注に≪上の『長恨歌』の一句「霜華重し」を「霜華白し」と改めたとされる。≫とある。是を書いた源氏の思いは＜新たに紡いで行く事が出来なければ夫婦の思い出は過去のものとして積もる霜に白々と覆われて行くしかない＞という残念な悲しみ、だろうか。

「君なくて塵つもりぬる常夏の、露うち払ひいく夜寝ぬらむ」(和歌 9－21)

「乾いた枕で寝付いても、紡げぬ夢に濡らす朝露」（意訳 9－21）

*注に≪源氏の独詠歌。「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」（古今集、夏、一六七、凡河内躬恒）が引歌として指摘される。「とこ」は「常夏」と「床」の掛詞。≫とある。この引歌は「雨夜の品定め」でも、当時の頭中将が＜源氏の夕顔＞となる女を＜常夏＞に見立てていた時にも引用されていた。引歌の筋は「夫婦のトコに塵を付けない様に大事にしてきたトコなつの花」で、この歌でも「床の塵を払う」が「共寝を用意する」と言う意味の味な言い方として使われる。当歌の筋は「姫を失って常夏の露のように涙に濡れた夫婦の床を、常夏の露を払うように夫婦の床に積もる塵を拭き払って幾夜独り寝したことだろう」という、惜別の歌。

一日の（ひとひの、先日源氏が宮に御贈りになった）花なるべし（花の残りなのだろうかが）、枯れて混じれり（其処の用紙に混じっていました）。宮に御覧ぜさせたまひて（大臣は宮に用紙ともども其れらを御覧に入れさせ為さりました）、

「いふかひなきことをばさるものにて（言って如何なるものでも無いといえばそうなのだが）、かかる悲しき類ひ、世になくやはと（こうした悲しい例も世に無くは無いと）、思ひなしつつ（思ってみたりしつつも）、契り長からで（親子の縁も長く続かず）、かく心を惑はすべくてこそはありけめと（こうも心を惑わす為に生まれてきた子だったかと思うと）、かへりてはつらく（なおさら故姫が不憫で）、前の世を思ひやりつつなむ（是も前世の因縁かと）、覚ましはべるを（観念してはいますが）、

ただ、日ごろに添へて（どうしても日が経つほど）、恋しさの堪へがたきと（故姫への恋しさが増して堪え難いのと）、この大将の君の、今はと（今となっては）よそになりたまはむなむ（他人になってしまったことが）、飽かずいみじく思ひたまへらるる（残念で残念で仕方が無い）。

一日、二日（ひとひふたひ）も見えたまはず（とお見えにならず）、かれがれにおはせしをだに（途絶えがちになって御出でだったのでさえ）、飽かず胸いたく思ひはべりしを（気掛かりで胸を痛めて居りましたのに）、朝夕の光失ひては、いかでかながらふべからむ（この先どうして生き永らえようか）」

と（と大臣が）、御声もえ忍びあへたまはず泣いたまふに（声も抑え切れずにお泣きになるので）、御前なる（宮付きの）おとなおとなしき人など（年輩の女房などは）、いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕べのけしきなり。

若き人びとは（若い女房たちは）、所々に群れゐつつ、おのがどち（その群れ群れで）、あはれなることどもうち語らひて（お労しいと囁き合って）、

「殿の思しのたまはするやうに（殿のお考えで仰せのように）、若君を見たてまつりてこそは（若君をお育て申す事だけが）、慰むべかめれと思ふも（不幸を癒せるとは思いますが）、いとはかなきほどの御形見にこそ（本当にお小さい御形見なので、皆がお世話の御用に与れるものでもないのでしょう）」

とて、おのおの、「あからさまにまかでて、参らむ(一旦里に下がって、また参ります)」と言ふもあれば(と挨拶したり)、かたみに別れ惜しむほど(互いに別れを惜しんだりで)、おのがじしあはれなることども多かり(身の振り方も深刻になるものも多く在りました)。

院へ参りたまへれば(源氏が院へ伺いなさると、院は)、

「いといたう面痩せにけり(随分ひどく痩せたものだ)。精進にて日を経るけにや(みっちり供養に勤めなされたのだろう)」と、心苦しげに思し召して(御心配下さり)、御前にて(院の居間で従者に)物など参らせたまひて(食事を用意させて源氏に摂らせなさって)、とやかくやと思し扱ひきこえさせたまへるさま(何くれと気遣われ世話なさる御姿は)、あはれにかたじけなし(身に染みて有難い)。

中宮の御方に参りたまへれば(源氏が中宮のお部屋に挨拶に伺うと)、人びと、めづらしがり見たてまつる(女房たちが久しぶりの伺候を珍しがって会いに出てきます)。命婦の君して(中宮からも命婦の君を通して)、

「思ひ尽きせぬことどもを(片付かない事がいろいろ在って大変だったでしょう)、ほど経るにつけてもいかに(忌明けだそうですが如何お過ごしですか)」と、御消息聞こえたまへり(と、御言葉がありました)。

「常なき世は(無常の世だとは)、おほかたにも思うたまへ知りにしを(一通り分かっていた心算でしたが)、目に近く見はべりつるに(いざ自分の事となると)、いとはしきこと多く思うたまへ乱れしも(疎ましいことが多く悩まされますが)、たびたびの御消息に慰めはべりてなむ(何度も御見舞い頂きました御蔭で)、今日までも(何とか凌いできました)」

とて(と言ってお応えなさる源氏は)、さらぬ折だにある御けしき取り添へて(ただでさえ麗しい美貌が哀切感に添えられて)、いと心苦しげなり(労しさも一入でした)。無紋の表の御衣に(むもんのうへのおんぞに)、鈍色の(にびいろ、薄墨色の)御下襲(おんしたがさね、背出し内着)、纓巻き(えいまき、冠の後ろ垂れ飾りを巻き上げ)たまへるやつれ姿(なされた喪服姿は)、はなやかなる御装ひよりも、なまめかしさ(優美さが)まさりたまへり(優っていました)。

春宮にも久しう参らぬおぼつかなさなど(東宮にも久しくお目に掛かっていないので御会いしたい旨を)、聞こえたまひて(源氏は女房に伝えなさって)、夜更けてぞ(夜が更けてから)、まかでたまふ(お帰りになりました)。